郎路生麻や幹主

连新伊则

號輯特春新



廣告賣 文社 を御利 トさ

鉢巻で考へてるなり、 こうし たら賣れ てゐるより いかいいつ のだらうと向ふ あだ らう

ばすさ走世一社や賣き廣何なれつりトへ文だ告 すが御通信は成るべく個條書に御指定によつて御伺ひいたしま

やうに御話を願ひます。

市内は

II

豊富に願ひます。

仕事を御引受する際には全額

願ひ参考材料なごは出來るだけ

するに努めます。御眷顧を伏て に研究も、 に關して廣告に必要な要點を常 はありません。 了の上精算いたします。 石しくは幾分かを御預りして完 弊社は ひ上げます。 ただの文案作製者で 立案文案に際しても 貴社貴店の商品

なく出

水上る名案

名文

むやう御相談ないたします。 の如きも出來るだけ御手輕にす 御遠慮なくお使い下さい。 質文社の手はお客様の手、 買文社の足はお客様の足です。 御依賴の用件は充分徹底する (1

祉 什の

紙製印 其

商標,

7

包裝。 カード。

ポスター

11

電車

カ

株券。

レツテルの變態装飾

雜誌川圖案。

雑誌及カタ

u 文字。

0) 表

V

立案。

商品の命名。

廣告交。 紙新聞 方法等 廣告上の

商品能書。漫文等

型版刷 他 タロ 廣告。 廣告漫畵等 紙型をも引受けます。 弊社の仕 機關新聞雑誌の編輯引受。營業案内 ウ井ンドバックの 案圖案も印刷製版紙型作製の不注意か グ等の代理編纂 事の連絡上、

これは折角の

の女版

答業科目に掲げてないものでも多少關 係のある仕事でしたら御引受致します 任にあたるのです 時日を速かにするため特に、代理監督の ら來る不成績を防ぐためき、 出來上り

大阪市東區農人橋二 一丁目七番地

話 東七七〇

番 社 郎

社

主

昭

和

JU 年

一月 元 日.



の投稿を願ひます。 清酒白鶴 醸造元 灘御影 敬臼

例により左記懸真川柳を募集します、川柳三白鶴三の握手の意味に於て、奮つて名吟 昨年本誌一月號で募集しました「白鶴」川柳が豫期以上の好評でありましたから、吉

題 ◇用紙官製ハガキ。一人 『白鶴酒ご長命』 一句限

賞

名

名

締切 岩本素人先生 一月三十一日

川柳雑誌及はくつる商報三月號

佳

名

投句所 大阪道頓堀新戎橋

第一席 第三席 作 Ŧi. 粗 壹 圓 景 ij 員 + Ŧi.

名

金

第

萬

庄



川柳雜誌 新春特輯號(第六卷第一號)目次

]1]		龜代	禁	御大曹	/	漫	雀はよ	辰吉	句作	何	無言	エラ・	假名	社	三角	てれ	按摩	前		
柳		樞代子の表情・・・・・・・・・辻 拾得物を出せ・・・・・・・・ 大田	2012	御大典餘興	內職	筆一	雀はすゞめなり	辰吉 こん越村	句作ご微醉	ぞは	無言の行西本	エライコッチャ岩本	假名遣ひの誤り松丘	社會批 評	二角の爆發楊井	くさ有	の藝術	後		
上		情・・・・・	酒				なり…					ナヤ	誤り			馬		EX.		
達	研究		Ħ	松並	······· 友淵	. 4	桑原	越	島田	るか	西	岩	松	さ人	**************************************	… 高	長	左	感相	
秘	0				-	ら四四				な		2.51	丘町二	生描		橋かほ	谷川一	右	想。	
法	其他]	左馬···(臺)	記	光哉…(壹)	貴山 (臺)	^	京郎…(云	加香…(高)	峯三	3	三笑…()	素人…()量	二二三	油寫	二南…()	これくさ有馬 高橋かほる…(三)	の藝術・・・・・・・・・・・・長谷川一轍・・(三	(–)	評論	
		33			E E		<u></u>				3	.	ぎ		\exists	3	=			
		まだ我		京阪	專鏡			窮	川柳		一舟	鹵簿	コ゛		實用		疊に			
				京阪電車の十三分朝田	專賣 寺杵 ··························三好	大	人 生活	屈さ	柳疲勞時代中野)	一舟氏の熱	奉拜	ム長)II	新案	響樂	に躍る人魚住田			
Ė		夢中	安	上三分:				さ中見	1			•	長	١ij	新案中島	樂松盛	魚…	麻		
好		麻生	川: 久	朝	·····································	谷五	*猪野		・・・・・中	三	谷村	安	… 喜田	村	中	*****松	住	生		
革		:#* .*.	流			花	1000			太	村	并ひろう	出 飯山:	花	島鐵州			路		
郎:(美)		度乃···(] ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	美…(星	新水…(五	站美…(天	村…(番	燕柳…(天	:	柳陽…(毛	郎…(三)	稔…(至)	奉 拜… ・・・・・・・・・ 安井ひろし…(そ)	山…(是)	菱…(三)	州…(至)	人…(英	į	郎…(2)		
0		0	3	0			C	0	J		3	0	3	=	0	0	0	-		



1	せ 作 二 柳 子	元 紋太 • 富士野	一二路・町二次の一二路・町二次の一二路・町二次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次の一次	卯 創出	受港	年 賀	假の姿	金玉の文字を顧みる	可松の
■ ●編輯 後記路郎•ひろし・ - 柳		抄馬集	■濁水・零案・柳秀・新州・無柳・加香・孤舟・笑太郎・愚陀・夫・新水・眼隠子・鐡洲・燕柳・加香・孤舟・笑太郎・愚陀・士・革郎・柳路・かほる・萬よし・舟々・悟郎・琴人・二柳子士・	(近作)	安井ひろし共選 松盛琴 人共選 一杯 子 選	子省二選	ろ舟郎		と



おい時には若い女に、年を老つても若い女に魅力を感ずるのが、異性が異性を愛する常識かも知れないが、近ごろをし、ごんな女を見ても、何ツ處に美しさを發見し、かの私は、ごんな女を見ても、何ツ處に美しさを發見し、かの感ずる。これはあながち年の加減でもなささうだ。それは最近までの私の職業が、女の美しさは何處にあるそれは最近までの私の職業が、女の美しさは何處にあるそれは最近までの私の職業が、女の美しさは何處にあるそれは最近までの私の職業が、女の美しさは何處にあるさせられてゐたからであらう。

上にそくがれた。そして女の容貌から服装、動作、持もの

カフエーに否んでも、私の眼は絶にす。

女の

出かけても、

屋が真ツ先に他人の足元に氣をつけるのミ何等のかはりがやな。これは変い。ないないら次へこ批判的に眺めてゐた。これは履物になる。これは履物になる。これは優物のない。

前後左右

麻 生

生

しかし、その結果は、若い女は勿論、

年を老つた女にま

路

郎

だそのい」處を發見するだけの努力が足りないか、それを 手頭の、襟切の、爪先の、容姿の何ツ處に美しさがあるここでは、いかのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、いいのでは、 は人知れぬ歡喜でなけねばならぬ。そしてプロフィールのにとしさが流れてゐるここを發見して、その美に浸るここに 發見する必要を感じない人々にこつては、ある人間は詰ら はのけん ひつとう かん を知つた時に、若い女にのみ美しさがあるこ思ふここのあ 別しなければならぬ。 川柳を學ばんこするものにこつて決して惡いここではない の句が摸倣句であるここを、自らさこるやうにしむけなけ てかいらなければならぬ。摸倣作家に對してはその作家 れる。眠つてるる作家に對しては先づ、その眠りから覺し らぬこ私は思ふ。しかし、さうするためには随分こ骨が折 るれば、ごつかに長所を持つてるるものである。その長所 なくも見い、ある人間は役立たなくも見いるのである。 まりに眼界の狭い事を思はなければならなかつたのである らしりだけてしまつては、その作家は永久に埓外に去つて ればならぬからである。君の句は摸倣だから駄目だら頭かればならぬからである。君の句は摸倣だから駄目だら頭か をのばすここが選者のなすべきここのすべてでなけねばな 眼、鼻、眉、頰、口、齒、耳、頤、髪等々々あらゆる點 人間も又さうである。ごんな人間にもいゝ處がある。た 先輩の句に憧憬するミころに、摸倣がはじまる。 これは 川柳の作家でもさうである。その作家の句風を静に觀て

死が決定されるのであるから一時的の模倣が容さるべきこ あるが選者の選句に定見がなく、作家の心を観るの明を缺てい、收穫があらう苦がない。作家の心をべき點もそこにてい、收穫があらう苦がない。作家の心をごも點もそこに 支配されてしまつて心の扱い方を忘れてゐたならば、決しらうこして腐心した結果、文字そのもの、言葉そのものに ければならない。選者も又さうした點に心してかいらなけ が。しかし、その模倣から一歩抜け出る處にその作家の生 こすればその選者は作家を殺すここになる。又巧い何を作っている。 ればならない。これでいるのだこいふ安心を作家に與へて こであるにしても、作家自身さうした點に思ひをいたさな 家自身も、さうした真摯な態度で作句を續けて貰ひたい。 美點を發見するここに努力を惜しまないのであるから、作 し氣づいて欲しいのである。私自身はすべての女に美しさ あるから血の気のない句が何句抜けたこころで、それが何 いつまで作家自身の侮蔑を買はずにゐるであらうかを思はした投句家が理ながも知らぬではない。が、さうした選がした投句家が理ながも知らぬではない。が、さうした選が 二句振けるよりは三句振ける方が更に愉快だこいふ、さう ものである。一句抜けた、嬉しい二句抜けた、嬉しい。 くならば、勢ひ作家を混沌たる世界へ三追ひやつてしまう はならない。若しさうした安心を作家に與へる選者がある を發見かつ感ずる三同様にすべての作家に對して、そのはられ んのたしになるであらうこいふここに、作家自身が、モ少 ざるを得ないのである。私自身は常にさう考へてゐるので



15	風		錢	か	貧			
ま	方		0	し	L			
	2	舊	音	家は	3			船
つて	L	冬	2	聳	0			1314
吞	あ	賣	2	O	な			
む	れ	交社	b	子	が			
は	3	加	P	0)	な			出
		興	2	あ	が			
惚	舟召	Č.		る				
れ	出	て	ぱ	方	L			
			6	は	<			
てゐ	0)		人	お	ŧ		麻	
3	pu			-		VOICE!		
る			が	2 %	pu			
	+		1-1-				生.	
な			住	わ	+			
6)			2	0				
							路	

郎

六



我人山不い傘々見ち打女な死しい妻慰し が間吹斷を借イ送言開のすんや のにのつ 信示 す行ば服を 目 慮 悪の待つ人や解が 0 うか がが 仙妓 今つたは がちの友目で伯友をせルム 3 3 よ手厚を氣父の叱る 眠〈 縫 司郷がの家 蹴 ごオ 揄拔五を れい風お ではけッ借 れ蠅り手が居れる紋りる子車りる蛛り

近作

路柳

同同島同同同同同同同大同同同同同函

郎 樽

根

阪

舘

同同終同同同相同同同伴同同同同同左

之

之

助

雨

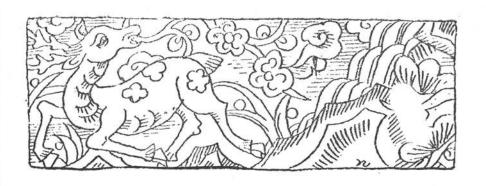
内

助



だ上親猜辛借母汽コ片」黄言香あゴ勤ち友懷線靴 中 二 はかをつ貰 H の鮭たろは 貰 艷 且 手 手に 子 む みに身 な 3 は 俺 か 紙 音た 本ず H 2 に立 賴 れ 母 墹 泣は た ま ゆ石ほすり筈れり車男い墓

白 卓 風 竹 仙 生 守



心相勘仲船學春紛さ愛五見魂父箒妬あ女兒慘生午在明 配談定裁が生のらて然六を魄ちのくんかのめ意後宅日 尺上はや目 な 聞 けのわけ車ん立 職 がな のけ合白後あ髪るば衝がて 待このけ夜 のて顔に貰 へくを心友動子堺輪 枕」に毎点餘つ言來ば を気を毎に 動のをに脊お 凧見つ負 たいつ歸せ金かくる 妓日孝 しふわ もかてて りずをらいのな 浮追る 地京め子待縫 3 を見ぐは 年ら てにれずてかにずこら つつつ男がを る出 ゆ出て指居けなしろる離たらか妻 がてま泣はそ見言が きて來きるるりて手」れかんけよけ來へきみれんひに

神同同鳥同同岸同同徳同同豐同同姫同同筑同同松同同 和 九 戶 取 H 島 島 中 前 II. 鎌同 同 穂 同同 樂 同同 休 同 同 閑 同 同 二 同 同 改 同 同 雪 同 同 波 不 月 子。亭 1 緒 生 竹 步



四生よお畫珍來浪休尼花榮本か葬ラ都猫老朝嘲夜湖酒 きく土來客客人み僧賣鹹當き 0 カをののにる待額 すい今日の戀での る朝日陰までボ畫レ知鳴尻名顏 氣を騙日づあし 陰 す過 6 き蝠を さて女簟室縣 抽たの灯得 傘 斗かやにら信るけし を撰 の死つ カロミー ロに の死つっ はの瓶 を れ用ミし醉 す日寄音運がな る 雨 さ つ が ん に 風 野 が で て 班 で が ぎのつをん淋るの れ捨 て 程 る 別 吹 T すさきせるぎす園りるきしるれくるるるりり始さ者し

同同同同同同同大同神同同同大同高同近同池同金同同

阪 戶

阪 知 江 田 澤

同露同美同悟同丸同重同竹同賀同嶋同た同白同好同同 一 陽 名 け ・ 事 空 葉 子 堂 芽 牛 し 蝶 次



的 カ 忘 同 二 雜 初 秋 藥 氷 横 面 寢 同 後 幾 戀 萬 幸 無 撞 葬 見 南 町僧る郷 嗣日に歳福邪 球 禮 殺 無 りエれ情番務戀風瓶葉 にいの のぎか生負見 の物の目』のに 韶程か ょ 多小細筋手 けらが妻 の胸 屋落 此のるるれ過の te き着へみのずのもるぎ安き 貯相に ら月文毛ミ當 幸いば仕頃 屋 て オ 事 づ ン めの技地給に脛のて 111 醫しにつのミ 向者がある取 趣 吹 女 景味事さ出れもかが見 吐せばへ 出 り 病 ひは みれへ 0 て 减 女 合 來 續たた な持し加女な か りちてへ房りぜるる客ひるるせけ儘りりさる來すぐて

同石同豐同徳同大同神同同同大同金同東同石同大同鞍 111 橋 Ш 阪 戶 澤 京 111 Ш 阪 13/2 同水同梅同天同素同東同か同忠同三同雨同素同菊同草 岳 洋 波 聲 萠 鬼 子 月 里 坊 ケ 八 浪 路 明





出ご出ち目打死居大呼出人新畵馬黄お炭お境初自は奥 合ぬ候弓鈴展垣妻も車金祭俵妾遇白惚らさ ま叩 一立のをに小のを れかんでかはをりを、派 目 一一 人派客見石軽無語髪はらご う職れふ待が言 a T なでば ぬ俺た有長若嫁を額んご石るは寄來身けれ のさずはな 本によ型は 恐下もな折碑ミな附 くしか 親れの位い帳を 見て サル の親 下るの家をの家を を見て一方がを整って一方ができまった。 片根瘤。 てが派整ミををけさりな废 見の揃かつ見置せ通に過へ思省かの去返二 り粉ずるみひずきせきるり居ぎてひきへ店にりひんり



其 塔 取泣車 3 車 順 痛 外可 疲 抱 B 辻 追 社 旗 俺 3 務 か + 1= 3 次 T む Ŧi. 0 Ŀ 休 To 0) 3 船 所 1= E 齒 I: 直 0 C 何 1 灯 了 ま 目 事 か 1= が 僕 0 17. な # 18 6 露 0) つな T 爪 0 te 見 訛 木 T 出 艳 は た 仕 鄉 心 店 先 魚 居 3 ま T 友 to 亭 程 闇 責 9 土 髪 は ぞ す 6 ば 樣 3 は 0) 持 主へ む は B 3 に 時 盛星 娘 藥 か 時 這 音 0 2 大 舞 長 当 熱 1 t 驛 3 間 つ丈 計 か 0) 0 入 中 6 夫 が 分 男 れ 11 4 筋 た 知 待 氣 な 賴 人 ん見 見 途 醉 40 3 老 に 飯 黎 飯 掛りな に 0) 橋 半 0 ょ な V 专 6 1 T to te 其 < 貫 が 端 淚 か T T 6 母ならん そ 居 出 居 れ \$ 見 # な 踊 な な L T 3 3 3 \$ 6 0 0 2 す 0 0 0 U

西神大神鳥同大長福 大別營金同大別 同大神学 都 須 阪 府 池澤 阪戶宮 麻 戶阪戶取 野 阪 岡 阪府 鐵 敗 津 一 聽 吉 鶴 好 郊 夢 高 假 龜粗豆觀湯 東 吐 寶 鐵 ば FJI 新 Ŧi. 名 句 坊 舟 綠 村 谷 Ξ さ 始 松 郎 峯 峯 子 坊泉子影秋月主 丸

Ξ



ウ 薄 散 下 白 松 歌 # 面 + 野 無 足 成 檢 飘 芸 壁 姿 T. 給 菲 錢 1 T 良 駄 它 土 見 理 3 th 髮 Ħ 音 村 to 1 で to 18 ま 行 に to 0) te 0) 樣 ^ 0) を 18 to から 持 は 吳 で 音 1= 1. 惠 け 眼 L 今 受 B 捨 與 あ 順 2 歌 た 芝 忍 れ 3 1= V な 次 0 H T け 曜 ナニ た は ス 3 が 云 物 事 れ 6 ~ 第 手 か れ が ば 丈 損 3 肩 n 0 見 3 to 3 ょ 大 ば 1 ば k は 嫁 狂 U # T な ľ か か お To 游 出 人 6 0) 淋 階 息 君 た C 0 L k 賴 0 な 1= 來 Ш 3 E Si ès. 1: お L 者 母 は 0) 3 が 1= 氣 な 82 酌 < 3 1= か 6 11 馬 短 L 子 ち 顏 年 事 0 I 6 近 L 見 鹿 11 金 L 俺 長 70 が 癪 氣 6 T 1=1 12 は な T 晴 1= 拔 to を づ 講 2 煙 來 た な か は 遊 立 買 步 2 な 見 見 17 義 دې れ れ t= T ひ T 管 \$ 0 癪 < 3 6 \$ ね 錄 5 3 0 75 ち

111 平. 兵 尼堺大島 兵 大 京 大 同 同 盤 同 大 神 同 5 奈 形 鮮 塚 庫 崎 阪 根 庫 阪 城 阪 阪 川 池

風鈴攺 鶴 美 鬼 銀 芙 珍 東 太 鯉 言 雪 菊 湖 波 智 狂 逸 萬 蓉

子 坊 樓 樂 水 子 郎 陽 路 友 也 峰 舟 紋 狂 緒 笑

四四



E 就 4. τ Ø 斷 想

柳樽と武玉川 111 村 花

•

菱

•

秋の半ばだつた。

澤支部の坐談會に呼ばれて居たのだが、何を談していくか少し。 電車から郊外電車、それから又小さい軽便鐵道のやうなものにでなり、こうだけなり ある日私は鶴來の比咩神社に行つて見た。金澤の町から市内

うな顔をして私を見た。 こ立つたけ謂日本大三云ふ感じの大が變な奴が降りた三云ふや めて見度いこ考へて居たのだ。鶴來の驛を降りるこ も考へて居なかつたので、散歩をかねて何か云ふべき事をまこ 耳のピン

つまらない何だこ自分でも思つた。それから又かへりの乗り 珍らしく見る小 の日 本

これ
こ思つて居る間に、柳樽の句や武玉川の句がいくつもうか 表面から見下す態度三内面から叫ぶ氣持三の二つについてあれていると、など、はは、ないのと中で考へ込んで見た。句を詠む態度について考へて見たものと中で考へ込んで見た。句を詠む態度について考へて見た のでなしに、こんなちょつかな考へ方で、云ひ表して仕舞つて はいけない三云ふ意味での勿體ない考へだ三思つたのだ。 は勿體ないやうな題目だこ思つた。座談會をあまく見たこ云ふ つた。ごうして、思ひつきの座談會なごで話し切つて仕舞ふに んで來た。そして けれご私は其晩、電車の中でふいこ考へついたのだこ云ふ前 三日へ出して云つて見るこ、此の言葉は、なかく~いゝこ思 柳樽には批評があり、武玉川には描寫がある。

談會の時三同じ態度で私の考へを云ふ事にする。その點を諒った。 まつた人々は大變それを感むして異れた三云ふ印象を受けた。 まつた人々は大變それを感むして異れた三云ふ印象を受けた。 まつた人々は大變それを感むして異れた三云ふ印象を受けた。 までまぎれて出来なかつた。新年號の原稿をたのまれて、今筆を此の考へを文章にまごめて路郎君に送らうご思ひながら、多忙の考へを立ふ事にする。その點を諒った。 まつた人々は大變それを感むして、うろ覺にの句を引倒して皆にその談話をした。 集置きをして、うろ覺にの句を引倒して皆にその談話をした。 集

こいふ柳樽の句がある。批評こ云ふ事を雕れて此の句を考へ鍋 鑄 掛 す て つ ぺんから 煙草 にし

が生れて居る。
が生れて居る。
が生れて居る。
が生れて居る。
が生れて居る。
はいから見下した所に此の句がない。
はいの句はな派は社会、これがいる。
はいれている。
はい

こ云ふ風なものが窺はれる。

の貝

もさびしき

3

スミオールス

今出た海女の荒い鼻息

武玉川の此の句を見るこ、一見それは客観の句のやうに思は武玉川の此の句は、態度は客観して居るやうに見にながら、それるが、此の句は、態度は客観して居るやうに見にながら、それるが、此の句は、態度は客観して居るやうに見にながら、それるが、此の句は、態度は客観して居るやうに見にながら、それるが、此の句は、態度は客観して居るやうに見にないのない。主観を離れて此の句を味はふ事は怎うしても出來ないのない。主観を離れて此の句を味はふ事は怎うしても出來ないのない。主観を離れて此の句を味はふ事は怎らしても出來ないのか。

る一人の藝術家が、自個の感覚を止直に真剣に表現し描寫したる一人の藝術家が、自個の感覚を止直に真剣に表現し描寫して、機智にユーモアに由つて第三者の頤を解かせるに對して、機智にユーモアに由つて第三者の頤を解かせるに對して、機智にユーモアに由つて第三者の頤を解かせるに對して、機智にユーモアに由つて第三者の頤を解かせるに對して、なく、要はその作句の態度を考へて居るのだ。

くて描寫である。 共に客観に似て主観である。批評でなば玉川の句であるが、共に客観に似て主観である。批評でなば玉川の句であるが、共に客観に似て主観である。批評でな難 業 に 残 り す く な の日があたり

これも柳樽の句であるが、同じ上草履の句を見ても武玉川は上草履客がはいては靜かなり寝たふりでちくいちに聞く上草履

こして、そこに一種のうらさびしさもあり、何こも云はれぬ情でこ云つて居る。私は此の句が好きだっうれしさの心持の表現うれ し さ は か ゝ り 次第の上草版

他の心が、個の心の中に生きるこでも云ふ事が出來やうか? 々の作家の心境に我々をごけ込ませるものがある。換言すれば 句それ自身が藝術家の壁であり魂であるやうに思はれる。個 曹遍的の批評を爲さうごする心境さへも窺ばれる。武玉川は、 けやうこする態度である。自こは個、他こは多である。即ち、 自己の心理を以てして他を極めやう、自己の心を他の心に裏づり、 心持を捕へて居る。『客がはいては靜なる』上草腹の見方も『 に此の句が生れて來る。もう一ッくわしく云へば、自己の心持 ない、炒くこも遊客の心理を客觀し批評し諷刺しやうごする所 寝たふりで聞く』のも面白いが、そのいづれもが、自分の心では 草履だけや考へて批評しやうこするに對して、武玉川は人間でき 味がある。雨者を觀じ來たれば、此の僅かの間にも、柳樽は上

す ぎてすごい賣家

0)

か

戾 3

て事気を客観せしめるものである。 己の主観をそのまくに表現したものが、此の句を見るものをし きである。 兩方こも鳥渡した感想こも云ふべきである、寫生こも云ふべ けれで、いづれもそこに客観ご云ふ態度は無い。自

番離れにも分ろ題目の女について考へて見やう。

叱られた娘その夜 は 番 がつ 专 柳 樽

叱られた日の わ U Ŋ <: れ (武玉川)

四五年も御講に目立 つ 緑 遠 3 柳 樽

娘のはたちや ば な な 0 、武玉川

二人してたけた娘をうちな (武玉川)

あの後家に和尚柱馬ご打たれたり 柳

寺の衣桁に後家のづぶ濡れ

(武玉川)

樽

方面を見やうごするに對し、武玉川は、女房ぶりごも云ふべき 柳樽が女房三云へば、亭主に對し、子に對し、世間に對する

點をしみんくこ眺めやうごする。

長く寢る子の無い女房美

L

か

(武王川)

樽

店先へ出ては亭主をにくが ら せ

ある。今それの中思ひ出した句文けをあげてやめにする。 事こ云ふこ出かけずにに居られないたちだ。皆さん失禮します もう一つ、武玉川に我が『日本』こ云ふ事を云つた何が少し こうまで書くこ、急にすりばんの音がした。火事だ。私は火

見方がいくこ思ふ。武玉川のねうちだこ思ふ。 H は 風 ほ ごにな

帶ミ云ふものは日本

のうし

ろつき

(十一月廿六日夜半)

柳川

虾

いふ。そういふ人々は取放して置いたら、翌狀に一々答へるは 新年苦痛の第一であるさ私の好きな文人の正月追憶に 三千もくる賀 ろう。然し小學の校長が生徒からの年始狀に年から見も知らぬ差出人の分は なくなるだ する。必ずしも道理のない運動でもなかろうかなぎらせる。一方これら廢止の叫びも耳に の裏に轉がつて居るのを見せつけられては、 大きな門松が松過ぎに、厄介物さして其の家 返えさないのは見迯し得ない一事である。 た方が悧巧な業でもある。 支那式にお目出度盡じの 對句の聯でも揚け ら、年々歳々濫伐するは考むものだ。いつそ られる、門松が單に裝飾丈けの意味のものな 門松整理=廢止しばない=の要は 痛感させ 門松と年始狀= 迎春の気分さ親変な

門松は門前にのみ立てるものではなく、

があり松がトンドの火に焚かるべき経過 れるのは 入り口例へば物置 感を與 されらのである 私は小松を門柱にうつ、門松は一名門神経による。 到り伐らべきも亦神聖さである。 もわかる。 守貞漫稿には、京阪の門松は豪富百戸ミー もある。 松の木へ禮をしてゆくのごやを八古句 こ稱す。これで あの根のついたままが、根強 松を自らし或は年男が一山に お正月の神様が松に 松全體の姿が幸福を象徴する してみれば祭祀の精神 馬屋勝手 等日に 因り代表 も飾 Vi

に極いる注連縄を張るのみご記す。 雖 松飾三は氏家ではなく宗氏の門で玄關の た。 こあつたので。實は本稿を書く氣になっ たのであつたが真山青果氏も同書を引 に椿を用ふる。甲子夜話の記事を見附け 方を正面にむけて立てる。松を用ふる所 の式は勝利を得た折りの古例に因つたも の大名屋敷には珍奇なのがある。對馬の 『川柳年中行事』に『對馬の松飾不明』 6 對馬 松飾には色々の風習があつて、 戸口兩柱の ご北 松 上或は下に釘し、戸上 向(文政) 武家 しま

して發表された。

砂利』をお讀みになつても、八王子は總にたものなのである。斯る風俗は『玉川の家であつたから、戸外にも皆内向に立ての家であつたから、戸外にも皆内向に立 手の上野廣小路なごは、一側丈けが買女で、このである。 は吉原であるけれ共、主ミして坊さん相 後ろをむ ける別世 八古句

くなる。これは客不出さ云ふ表兆なので、縁 のさある」さの註文けでは、吉原が理窟くさ ・向側の門松さ背中合せに 中央に立てたも つたので門松を入口の前に立てす。溝を隔て 町には中央に溝ありて 往來も餘り廣くなか てそうなつて居る、内向きである。 |正月の眞中にある五丁町」、古句 - 「昔五丁

四壁施茂蔦の『わすれのこり』に、 喜なくては色も香もない。 皷の胴をつくりて餝る、甚だ美事のも し鍋島家は松かざりのうへに、藁にて

人餝ミいふー「春の雪だい~~縮む人 に人を多くならべ置きしこれを佐竹の のなり - 「御領分田から皷をすぐ造り)佐竹家にては松を立てず、門の左右

三)南部家は橙野老神馬藻昆布に添へて 鹽鯛の大なるをふたつならべて餝る

> 人に門松獎動をやつた事がある。喜ばなど、からまでうな 私が臺灣在住中であつたが總督府が臺灣

,のは松を門に立てるは、内地で忌中札

門松なし 立て、天葉をつくる、…御旗本衆の岡田氏も 竹を切らず 中より下の枝を去り長き儘にて れば付る飾も無し… 又直参衆の曾根内匠はに立て、左右には不設、就ては上の横竹なけ く拵へて表へ不立 裏に臥して置く計り也… こ云ふ、此の餘聞き及ぶには姫路侯の家中に 名波家に仕へたる力丸氏の門松は 一方計り もご最上候に仕へたる本城氏は、松は常の如

根本から雪隠しまで飾り縄を引張つて置いる。 こも大晦日に片方丈け門松をたて、他はまなく理由の存する。事ではある。北上州悉くはりの存する。 用意したまくで立てぬ家例もあり、松の倒して置く、竹は添っない、或は門松は

「松餝に蘇民將來子孫家と書きし札をかけら く風習もあるそうである、九鬼家では りも難し」忘れ残りつなごさある。 く取り得るものは戦場に 一番の印を得るよ のもまた人に奪はる、其混雜する事甚し、能 にして取れざも人に奪はれ、其のうばひしも れど、只一枚の札なれば甚だ得がたし、漸々 なりこて、彼の礼を取らんと集る者數白人な る、申の刻に至りて門のしまるを待ち気除り

日門松代用に樒を立てる家があつたなら 門松をたてはじめたるなるべし』こ。尤 られるかも知れぬ、湯本畑の民家では十 或は不幸でもあつたのではないかミ祭せ も此の説に反對意見も見受ける、若し今 ー此の松の枝を戸にかくるをまなびて、 椒性芬香又堪作樂、又繫松枝于戶同此義 巨旦が墓じるしをまなびたるものなり、 うか。廣益俗說辯なごにも、『正月門松 の强要も風習を異にする者の上には質重を貼るに等しいこ云ふのであつた、官吏をはるにない。 今按するに歳華紀麗云松標高戸一董助同 をたつる事は、 いこ思つた。夫れは多分支那慣習であら な考慮がいる、一朝一夕の改變はよくな 俗有歲首、 酌椒酒而飲之者何哉、 もろこしにはなき事なり

藤井高尙は説いて居る、 神靈の宿り給ふ上古祭祀の遺風なりこ、 ふのである、榊をたてたのは神籬ミテひ 今も宮中は松飾

橘類の系目出度いにかはりがないこ云 二月末から六尺位の樒を建てたそうで

0

良の世談問答に 自に四方拜を行つたからである。 11 • 昔は堂上華族もなかつたのは各 一條新な

べるに らず、 門の松立つることは昔よりありたるなるべ し、賤が家居は大かた封戸なるにより民戸さ のなれば、 づり葉は深山にありて、露霜にもしほれぬも 0 歳をちぎり、竹は萬代を限、草木なれば、年 賤か家居かつくり侍れば 門を立てしかば、八門ありしなり、 申侍れど、昔は一町の内を五丈づつにわりて はどめの祝ひ事に立てはべるべし、齒朶ゆ その門の前に松竹を立て侍り、松は千 こめ繩に かざりて同じく引きは 門なかるべきにあ 其の内に

鎌倉時代前から今日 の如く行はれてるた

が、 方もある、 門松へお正月に食べる餅等をつるした地かます。 るものが存する、 うか?。 事も知れる、 へる地方もある、 とう。又門松の根元に三ケ日お節を供支那の搖袋樹なごの變化ではなから支那の搖袋樹なごの變化ではなから クリスマス 其の方法なごも興趣 ツリー 式である

ふのか、誹讃蔵時記に、正月十五日芝をそこで松の内(しめの内)はいつ芝をい 松の内注連の内ミ云、江戸にては七日に

松枯れて竹たぐひなきあ

ーたかな

元龜天正の際武田勢から

りご、 今年より七日に取拂、 にては古來のごごく十五日迄飾 の飾を除く近來の風俗なり、 武江年表には、 是它 寛文 は十六日也こ 一年家々松飾 らるよ 黑紅

も十五日では長過ぎて乗氣がしない。 あ 3 朝寢坊六日 松の内我が女房にちよつこほれ(古句 そうでないこ 松をこりはじ め(古句)

にて新牛の嘉成に必ず鰤の 肺 月三の意。二十正月は團子正月こいつて これから後が新年客を片づけた女のお正 厨子をく 十五日を小正月三呼ぶ、女正月三いふは Ċ. 骨止月ごも名づけ、 を用ふ、 京大政 4045

0

3, 内ご 江戸城の門には竹の未を切つた葉なきをはいます。 段々名がかはつてゆく出世魚の縁喜であ 物ごしてこれ 其魚の骨に大豆酒の糟を入れ煮熟して節 **清濁のテニハ生死** の 此の十四日から二十日迄をも注連の いつた事情もある。 を食ふ、 鰤は幼魚時代から ご 竹(古句)

> 事 の一句を送つてきた、 竹は武山、居合 せた酒井忠次が直に 松は松平で徳川の

侍臣に物語つた處、かく詠み改めたこ云と、一説には家康が夢中の詠を覺めて ごテニ 松枯れで竹だくびなきあしたかな へ清濁應用・ 『武田首なき』こな

似て居る。新意春初草、生色雨後花。 記してはる、昔は官衙が三ヶ日公務を廢した門松はたてぬ、立春に白紙へ目出度い聯句を らるゝけれ共、鮮人の多くは未だ陰暦であり 私の住むで居る朝鮮は、年 ふのである。 が、十五日迄延長した處は、十五日正 一年内地風に 月に

大谷五花村主 辛

東 北 柳 價 拾 錢

品 받 白 河 東

北

111

柳

月刊 柳 £ 誌

大阪東淀川區中津濱通 一丁月 價 拾 錢

柳 1: まむ L 吟 社



ア鉛鎧吐ご

子奉お

祝互

のに

夜 心

淋 母

1

忘

T

留れ

業 te 0)

0)

ń

慢 お

が一 汽

つ殖

6 番た

子

をの 越中を た 夜 賣 野 具 をのて 5 越 らつ夜 軒ろの を 引つ被り めぐる冬 立

山闇哀

葭

戸らの ン筆 テの はれ子 ナ 文 開 T をはづしつ」ましやかに住 ス か オー ず將 41 0 朝 湯 18 0) 霧 間か子にごられ せ乔 むで 也 夜 3

O

3 Co 0 顏 T は な が 化粧の部屋にゐる 見 0 0 は 82 寫すまじ 一尺ざし さ れ 束

瀧 强

な

0

がへい

鏡 子

ま

ょ T T

b

持 來

ば 男

刀 0)

は

ば

た

顏 4.

3

O 悲 解 觀 1= 5 \$ 唉 してゐる 6 < な 0) < 葵 0) 君 6 か 0) 5 花 冬 H を らしい 0 かのわかる頃 b 美 閉じ籠り ts 枝 П

女

飯 よほ 5 10 别 莊 0 T 3 3 3 步 3 7 6 時 < 計ごまつて居る思ひ L 0) E 薪 ス 0) は ょ 吟 ぜる 花がさき 40 京の 秋 女

三活 あ臆み 味 動 の病 か 線 小 な h 1= 屋 おか 父 埃 普 5 吾 力 請 が ·f· 國 が 積 0) 0) 3 目 話 日 立 11 服 6 が 0 帽 111 は 神つ が 歲 3 笑 見 0) 炬

江

7

倒

12

1=

6

助

U

北

ま

h

我

が

夫

よ

元

H

欣

女

漫川畫柳

假

の

√

<u>-</u>

柴路

舟郎

畫評

となり 白 蝶図を出た時はと法被しん

らこ燃のる青春の血、何れへか流れ 世の中は、ごつちかへ片づくもの 世の中義一閣下も首相たらざれば、 ただの田中義一なればなり。めらめ ただの田中義一なればなり。めらめ

ゆく。宿命は悲し。



お前等のためと消防疳が

事なり。されご趣味は時に道徳を超事なり。されご趣味は時に道徳を超いため、消防は職業なり彌次は趣味なり。消防は職業なり彌次は趣味なり。消防は職業なり彌次は趣味なり。治療を置せずして、先づ物たらなさを感を置せずして、先づ物たらなさを感を置せずして、先づ物たらなさを感を置せずした。

味るの

りしにはあらずやの許せ彼等の悪趣越す。昔は消防さへも一つの趣味な



時よ

北北東 北風 息子とついてはいる 息子、母、軒並の淋しさ。



があり 糖松

節約ぞ。我聞く伊勢屋は節約以上なずれて、ままで、ここでのは光る。されご辛なり。そこに節約は光る。されご辛なり。そこに節約は光る。されご辛なり。そこに節約は光る。されご辛なり。そこに節約は光る。されご辛なり。そこに節約は光る。

べし。

又皮肉ならずや、寧ろ慘たりこいふりこ。その伊勢屋に節約デーあるも





好

郎

革

に志さす人に取つては當然の欲求ださ考へる。それで如何にすればに一寸返答に困る。だがもかもさうもた欲求を持たれるこさは川柳 だけか讀者諸彦の參考までに書くこさゝする。 其時には「ごうしたらお金が儲かりますか」 ご聞かれた時ご 同じ様 「川柳はどうしたら上手に作れますか」さはよく聞かれる言葉である 熟な僕さしては僭越王極のここであるが、自分の考へてゐる 上達法 「川柳が上手に作れるか」と云ふ問題に對して私見な述べることは未

こかに破綻がある。非常に美しく化粧はしてゐるが足袋の尖が そして最後に足許を見る。それが頭の尖から足の尖に至るまで を観察するのに普通の人は先づ顔を見る、夫、ら服裝を見る。 チャン三揃つた服裝をしてゐる人は非常に少いものである。ご ◇物の見方 それを如何に表現するかは技巧の問題になるので、先づ根 着想、觀察から説いて次に技巧の問題に移りたいこ思ふ。 川柳を作る場合には、 電車に乗つた時に自分の前に腰をかけてゐる人 着想、観察が根元を爲すものであ

> 思ふ。これは獨り人だけの問題ではなく、物に對してもさうできる。これは獨り人だけの問題ではなく、物に對してもさうで 自分の周圍の人は一人三して川柳の題材三ならない人は無いこのが、たらない。 又缺點であるかを發見する。こうした見方で人を觀察する時はまなられた。 を忠實に頭に入れて、その中で何處がその人の特長であるかい。 て、爪の垢が溜つてゐるこか、或は着物や羽織は絹物づくめで 汚れてゐるこか、 の人の生活が出てゐる、又その人の個性が現はれてゐる。それの人の生活が出てゐる、又その人の個性が現はれてゐる。それ あるが、帯揚げが人絹物であつたりするここがある。そこにそ あるこ言ひ得る。 ダイヤの指環をはめた手の爪が長く伸びてる

例へて見れば上かん屋の主人が醉漢を持てあましてゐるこころ 人を観察し、物を見てゐるこそこに一種の川柳眼が出來てくる 行き合はした時 これが物の観方の練習法で、絶へずさうした考へで注意して

上かんやへいく~くう逆らはず 常 下

つ始める

上かんや時には客に管を捲き 萬よし

ばならぬこ云ふここが第一の條件こなるのである。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。 こなる、そこに万よし老の個性がハッキリご出てゐるこ思ふ。

◆物の感じ方 人間は神經がある以上物を感じる力がある。
◆物の感じ方 人間は神經がある以上物を感じる力がある。
その感じる感じ方は人に依つて皆んな違ふ。そこにその人の個をの感じる感じ方は人に依つて皆んな違ふ。そこにその人の個じが出るのである。だから甲の人の感じ方こ乙の人の感じ方が覚ふのは常然であるが、その感じ方に深く感じるか、浅く感じるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければるかに依つて非常な差が生じる。子供を死なした人でなければる。

子供を死なした直後の父親の氣持こしては、何故自分の子は死い撃校で澤山な子供が遊んでゐるのを見ても何ごも思はないがいない。というできた。これはロンドン君を死なした時の路郎主幹の句であるが、我々これはロンドン君を死なした時の路郎主幹の句であるが、我々

子が死んで學校に子の多い こ ミ

がない、それを深刻に感じようこするには自己の體験を基礎こ 深刻に感じなければならぬ。薄つぺらな感じ方は人を動かす力 には良い小説や戯曲が数多く入つてゐるから樂にあらゆる人情 本文學を集か世界文學を集でもよいから讀むここである。それほと言います。 毛、最近のものでは堺利彦、生方敏郎、岡本一平氏等のものなけ、思索に 物、我國の物では竹取物語、徒然草、浮世風呂、東海道中膝栗島のないによる、たちがあるまで、たながないでは、 言へば、それは本を讀むより他に方法は無い、その本も低級ない。 思つて自分の子供が死ねばよいなご、考へる者があつたなら、 する事を良書を讀むさいふ二つの方法で感受力を養ふここが一 の機微を知るここが出來るこ思ふ。之を要するに物の感じ方は こでは物の感じ方が違つてくるこ思ふ。それが出來ない人は日 ごを讀めば可成り川柳的なものが多く、讀んだ後言讀まない前 ード・ショー、愛蘭のダンセニイ、米國のマークトーエン等の ものでは駄目である。先づ文學物であるならば、英國のバーナ それは羅馬を焼いたネロのやうな男である。 ら出た物の感じ方であるが、若しこうした境地を味はひたいこ た學校に子供が多いここに非常に心を惹かれる。これは體驗か 供が遊んでゐるのや見る三羨ましい、今まで何三も思はなかつ んだのだ、生きてるたら……こ思ふ、そして無邪氣に澤山な子 然らばごうすれば體驗三同じやうな物の感じ方が出來るかこ

番の近道であるころへる。

た心境を歌つたもの言考へるが、此處まで客観化したこころに

◆作句上の態度 物を觀る眼が川柳的になり物を感じる力がなって來る。それには何にする事件でも思想でも何でもよい、とれを縦に見、横から覗き、斜にして見、底から兄上げ、上から見下し、あらゆる方面からゆつくり観察して、その中心點がら見下し、あらゆる方面からゆつくり観察して、その中心點がら見下し、あらゆる方面からゆつくり観察して、その中心點がら見下し、あらゆる方面からゆつくり観察して、その中心點が分ら何處にあるかこ云ふ事を先に摑むのである。その中心點が分らの一處にあるかこ云ふ事を先に摑むのである。その中心點が分らの一處にあるかこ云ふ事を先に摑むのである。その中心點が分らない間に作句をした場合の句はピントほけの寫真のやうなものない間に作句をした場合の句はピントほけの寫真のやうなものない間に作句をした場合の句はピントほけの寫真のやうなものない間に作句をした場合の中で然続して、思ひ付や一寸したいる。この中で十分に鳴み降いて背化した後に始めてその中でも方に鳴み降いて背化した後に始めてその中で見を、心の中で十分に鳴み降いて背化した後に始めてその中ではないの中で十分に鳴み降いて背化した後に始めてその中ではない。

題で、これを詳しく書いたら一冊の本にしても足りないくらいだ。 耳に響く響きが快よいか、否かを考へる。これが所謂音律のでしている。 思ふ、次に、それを自分で讀んで見て語呂が悪くないか、即ち なる、それは眼に受ける感じであるが、非常に大切なここだこ 漢字にすれば感じが硬くなり、平假名にすれば感じが軟らかく 平假名にすべきか三云ふ問題を考へる。川柳は詩であるから、 の文字を發見するここが出來たならばそれを漢字にすべきか、 要である、メリケン松の柱で間に合せてをいたらいけない、そ か、敷居にするには此の木がよいかミ材木を撰譯するここが肝ない。 字を考へて見るここである。即ち柱にするには此の材木がよいと。紫 第一に考へる。その言葉(女字)が見つかるまではいろんな文 である。煉瓦が足りなくては大きな建築は出來ない。だから出 らしめる。つまり文字は建築に例へるならば煉瓦のやうなもの 字を豐富に知つてゐるここが技巧上の問題こして表現を容易なな。 ◆作句上の技巧の注意 作者が可成り心の中で燃焼させた跡が窺はれるのである。 ようご思ふこごか完全に表現するここが出來るかご云ふここを てゐる『一つの物を表現するには一つの言葉しかない』こ即ち 來るだけ澤山な煉瓦を川意する必要がある。フローベルは言つき 一物一語、ごの言葉(女字)を持つて來たならば自分が發表し 川柳は文字の藝術であるから、文

もうけたはごうの昔につかふて居ひろし

る、思ふ。

皆動へもう一日の熱を押し 素 人

『熱を押し』で熱のある鑑を無理して出て行く姿がありく)これを十分に騙使することが必要である。そして漢字で書けば硬れを十分に騙使することが必要である。そして漢字で書けば硬れを十分に騙使することが必要である。そして漢字で書けば硬れを十分に騙使することが必要である。そして漢字で書けば硬ないを十分に騙使することが必要である。そして漢字で書けば硬ない言葉はゆつたりした氣持、間のつまつた言葉は切迫した虱長い言葉はゆつたりした氣持、間のつまつた言葉は切迫した虱長い言葉はゆつたりした氣持、間のつまつた言葉は切迫した虱長い言葉はゆつたりした氣持、間のつまつた言葉は切迫した虱長い言葉はゆつたりした氣持、間のつまつた言葉は切迫した虱状に

> この方法を實行すれば自然に生活句が生れるものこ思ふ。その る。その日一日の出來事の中から川柳を作つて行くここである 却するここである。ごこまでも自己の個性は生かして行かなけ 然しそれに捕はれるここは禁物である。それは自己の個性を没い 書き取つて自分が作句をする時の参考にすればよいこ思はれるかが、 くの川柳を讀み、その中の佳句こ思ふものをノートに類題別に 表現の仕方をしようご努力するここが必要である。それには多いない。 無理に作つた句よりもよい句が出來、入選率も多くなるこ思はなり 日記の中の句を川柳塔なり、近作柳樽なりに投句されたならばらずない。 如何に美しくても香ひもなければ味もないものになつて了る。 ればならぬ。個性のない川柳は生命のない造花ご同じでそれが かを知り、自分は先人が發見しなかつた境地、又先人ミ違つた るここが更に必要だこ思はれる。 れる多讚、多作それも必要であるが、物の核心に觸れた句を作れる多讚、多作をでするというという。 な工合に物を見てゐたか、又ごんな工合にそれを表現してゐる それから日記をつけるここを御勧めする。所謂川柳日記であ

(妄言多謝)

文が多少なりこも御念者になることがあれば幸甚である

あるが、それけ拙文な讃んで戴きたいためのトリックでござる。

「川柳上達秘法」なんご三大きな見出した掲げて狗肉を賣つた嫌ひが

何ぞはるかなる ―(或る冬の日に)―

11 太

郎

居るのである。蕪村全集こそ嗣なるか 當然でもあるし第一見た眼の姿もよろし からある厚い本なので真中を開ける事は つてぱつたり開けて見た。何しろ一千真で、何氣なしに真中邊りのこころを狙き

机の上へ蕪村全集を乗つけて、その前に

さむさむこした冬の日である。私は今

一茶、蕪村こ名前だけは心得て居るが、 は俳句に就いては全然低能である。芭蕉 端然こして坐つて居るのである。元來私ただ。

痛くならない丸葉でも吳れさうな名前だ がしてあつた。勿論私は北壽老仙なんて いふ人は知らない。何だか孫悟空に腹の こあつて、北岸老仙をいたむ い。そこには、晋我追悼曲(延享二年) 然し私はその第一曲を讀むに至つ

買つて來た歸りに私に會つた時、その儘 貸して臭れたものである。買つた許りの ものを直ぐ貸して吳れた同氏の好意に對

して、今私は謹んでその書の前に對して

が

い。その私にこれは前田雀郎氏が銀座で あるかご言はれるこ速座に返答が出来な さてそれではその人たちに何ういふ句が

> て蕭然さして坐り直した。さうしてもう 一度口誦して見た。

千々に何ぞはるかなる 君あしたに去ぬ夕の心

が必み出て居るではないか。私は直に第 二曲に眼を移した。 れた。悼ましいまでに人の死に傷いた心 心手々に何ぞはるかなるー 一私は打た

君を想ふて丘の邊に行きつ遊ぶ

丘の邊何ぞ斯く悲しき

友を想ふ游士正に斷腸の一曲である。第一篇然に胸を刺す。小山を低個しつへ老

部公英の**黄に薺**の白咲きたる 見る人ぞなき

見る人ぞなき ――淋しい。 第二曲から續いた綿々たる悲調であるだ。

雉子のあるかひたなきに鳴くを聞け ば友ありき川を隔てゝ住みにき

悄然こ浮ぶ。次は前の鰤を受けて 川を隔て、住みにき― 此の單張な言

けふはほろゝこも鳴かぬ 友ありき川を隔てゝ住みにき

三反誦し更に茲で再び卷頭の

君あしたに去ぬ夕の心

幸にして土壌に恵まれず、水仙は地にす

千々に何ぞはるかなる

なほ最後の一曲 こ應へて居る。正に紹唱である。然も はできっせっ 我が庵の阿彌匠佛燈火もものせず、

花も参らせず

であるかこいふ事を必々こ悟つた。否寧 る。私は徒らに句を作る事の如何に愚か ある。言葉の人である。更に涙の人であ に筆が投げて居る蕪村は實に詩の人で

すこく~三行立める今宵は殊に尊き

まざり

痲 生

培ふ程、自然は何の援助も與へないで『 くみ、紅葉葵は根を絶にて私の努力をあ ないぞ。三冷やかに私の慢心を蔑むので お前の腕前ぢやないぞ、お前の腕前ぢや した。以來鏝を捨てゝ炊事に親しむ事一 こかたもなく葬つて終ひました。培へば

的に動く時、恰もマザリー

ラブのシン

ボルこして毛糸のひこたばが膝のあたり

て吳れました。私の指先に四本棒が機械

鳴尾からこちらへ移りましてから、不 らぶ 年あまり、最近心ひがけずも、第二の興 味が私の單調な生活に一沫の色彩を加ぬる。それでは、またいの 坐つて居るのである。 蕪村全集を乗つけてその前に端然こして こした冬の日でかる。私は今、机の上へ 私は卒然ごして本を閉ぢた。さむさむ

でころがる時、私の心はたい、伸びし こして何の蟠まりもありません。

…其有馬へ六年振に今度好きな川柳家ご

緒に行く事に私は興味を持つてるます

一角の爆發



藝 術

長谷川

こきくます。こんな手合にこも思ひまし 按摩の職なんて云ひますので按摩は職で にして居ます。それに昨日の箱母なごは こ云ひますので、それはあこさきを間違 て云ひました。ある家では仕事にかいら やりました。 たが按摩は立派な一つの藝術だこ云つて ない三云ひましたらそんなら一體なんだ へた事だこ云つてやりましたが實に馬鹿 うごしますご手を洗つてからにして臭れ 今日の按摩さんはその途の為に慨嘆し

るなり風呂番に「お流しいたしまひよか

なりました。 言此處に至つて私は思はずハアーミう

こめつさり出られて、てれくさかつた事 は『おじやま致します御めんやつしや 五郎の様な人に會ひびつくりすれば其人 で上つたり、皷ケ瀧へ行く道で熊太郎彌 」こ云はれ恥しいて鳥の行水の様に飛ん

てれくさ有馬

か ほ 3

けれご川柳に興味を持ちます…從つて川 私に取つて好い事か悪い事か知らない

何れの時、何れの所、

而して何れの人

ひ出の多い所なんですもの…花の坊に泊しくてなりません…有馬は粉婚旅行の思しくてなりません…有馬は粉婚旅行の思してなりません…有馬は粉婚旅行の思 のきも入りで有馬へ吟行するこの事…嬉 好きな方ばかりです…近い中にも柳骨氏 人で酒を吞む會には私のおかるに平衛門になる。 柳家にもしたしみを持つてなりません同 つ過ぎて水をうめ好い湯にして二人で入で レツシュな観耽氏や愚陀氏等皆それん でうまく息を合せてくれる万よし氏やフ 二度戦つて二度負けたり、内湯の湯が熱 つて手持不沙汰に宿のかるたを借り妻言

少くこも彼女等の出現は彼等にこつては 服に純白の制帽頗るモダーンタイプの女 臺に於て華々しく開始されたわけである 圖らざりし恐怖である。 ウエルムせんこする憎むべき敵であらう の赤帽を以てすれば之正に男性をオー 之を我國最初且唯一の白帽三稱す。從來 係にあるものである。大阪驛、濃緑の制 の間に於ても職業ご競争こは不可難の關 赤帽、白帽そして旅客、そこに當然起 男性對女性の猛烈な競争が而も同一舞

悲鳴を揚げてその暴狀を訴へる。頗る色の ちらも負けてはならぬここになつて了つ を得る為に赤帽も白帽も懸命である。ご るべき三角關係がある。旅客ご云ふ戀人 その結果赤帽は鐵槌を振廻す白帽は

が職業問題がかく單純に片付くくらいな 喋々するのは既に遅い。同一舞臺で勤土 かず』こ云つてるる。成任面白い考へだ 各赤帽目身の妻君を以て白帽こなすに如かるかなりのしゃっさいんとうこんだう 世の中である。刃を抜いてから仲裁に入 賞三新撲組が顔を合せば必ず剣戟の起る **・ ただなな なば な な はな まご し强ひて併立せしめる必要があるなれば つても默つて引退る連中ではない。 いそうは問屋が卸さぬ困つた世の中で 事こうに及んで赤白兩帽併立可否論を 僕の友人が此 な醜い争闘は影を消すのだがごつ 開係の爆酸ではあつ 問題解決策ミして『若

> 買つて』の音便。もつこもいつか私の、音便の誤りです。勿論是等は『醉つて』『音便の誤りです。勿論是等は『醉って』『買って』が正しく、是は『醉って』『またのきをといのは『醉ふて』『買ふて』等々のウルだりに 學者では決してありませんので過去は勿らもありましたが。へこいつて私自身文法 おかし、おごるこ訂誤して發表した柳誌をかし(可笑)をごる(踊る)こわざ! 論、將來も誤りは多くやるこ思ひますか ら御叱正を願ひます

アライコッチャ

間髪を入れす白帽持つて吳れ きらめた様に白帽髪をなで ち誇る様に赤帆何をかつぎ

名遣の誤り

F. 町

聞意 つミ入れて澄ましてるっこ、隣室の暗か それぞれ極密で携帯の一物を鍋の中へそ 汁會をやつた時の話しです。 ないが、良友では言かねる者共四五、闇くないが、良友では言から、猛烈な悪玉ななりない。 皆年輩から言へば不足のない分別盛り へた。『ヤーエライコッチャ』早速皆へ続の所在の間)から時ならぬ悲鳴が

い場合が多いのですが、それは別こして川柳や俳句は普通の文法ではった。また、また、よって、ないのですが、それは別こしてはない。

知し

れきつた誤りはなるべく正したいこ思

汁鍋の中へ入れたのだこ言ふ事が解りま やけぎでもしたのから思つたが、そうでのようでもしたのから思ったが、そうで で何事かこ思つて行つて見るこ今來た斗 した。〇には三人の子があります や鰌や』こ言ふ。生きた鰌を養へ返つた ない『何うしたんや』三聞いて見る『鰌 はないらし りのいが部屋中を狼狽て人馳け廻つてる 父さんはいつち偉いご思うてる ライコッチャく」三言ひながら い。真暗で何が何やらわから

ひます。

殊にそれが佳句である場

台で

ī 行

笑

醫者が食慾は三云へば首を横に振り 『熱 スを度外した、 五日間寢食讀書,時刻其他一 やろうこおもう。こだふただけであこは この十日程前風邪で店を休んだそして その五日間醫者に『風邪 一般ビジネ

想べても不可能な刑務所で終身氣樂に暮れ

言えい

ふ事に興味を覺に、

あらゆる欲を

り五日間殆ご無言で通した。それから無いない。 はありませんか?』三訊けば首を縦に振

各位の後援をたまはりたいご存じます。 だが實行する馬力がですこし不足で柳友 こ願つてゐる。可能性のある事實

作と微醉 H

同に

表する程 今迄の自分であり最近の自分でありまするます『正直に云へば笑へり女共』これが た時が興味の頂上に達したのだる思つて 句に忙がしいせいか最近これこ云つて發 の句が作れた時か、少量の酒に醉はされ 3 限の皆樂しいここばかりです、糧こ作 お陰様で川柳を初めてから川柳眼 事件もありません たが自分だ

御金を渡すよて買て來こう』『早うお金 の小間物屋でヘヤートップの大一袋を、 う』『なんだす』『すんまへんがな横町 戻りなはれやそれから外に一寸順まれこ なれんか』『へー』『碎けんようにして 『辰吉ごんお豆腐二十丁買て來ておくん とうし きゅう

> 出しな、店が忙がしいがな』……『今日 今度目から電話を掛けるは、其時はまける。 したで今日は負けていらんわ、ほんまに つて、途で碎けておまけに重ごうて徃生 はきぬこし二十丁此間君まけて吳れるよ て持つて來て賴んまつさ、あゝ重いな』

がおますいな』『ほんさんウァイここ云 さいなら 來月廻しになるで、綺麗に仕上げてや・ 上げんこ天神祭り見られへんで、勘定も 暑いのに急きに來るの往生するがな早ふ 仕上げな 君んここ何日も遅なつてこの 鳥の印刷ごないした金刷がすんだら早う あゝウマイここぬかつしよる。『あの花 ふな上半期の配當はなんほもろてん。『 ばかりして納めてんね、利益なんか何に もんやよつてお蔭で尻上りで契約品は損 云ふてんね君んここは値上ばつかりする あんた店偉い儲けて居なはるな』『何に 。ほんさん何日も ~やかましう云ふて

> こ直に上に目が付いて仕方がおまへん, いた位を喜んでるさかいな、あは……「 まだ若いよつてあきまへん一寸下駄をは 少しペラノーが行けるこ皆んなあれだす んあの子だつか神戸の商館を一寸廻らす 喫ふてシュウッミしてはりまんな』 『辰吉ごんは今頃頭の毛を伸して金口

骨がおれますな、へら …… 辰吉杏煙をようけ喫ふて、 御出で又不渡りをくわん様に氣付けてなり、たされた。もつこしつかり廻つて目を付けてんこ、もつこしつかり廻つて ……あそうかよしく……』『なかく 前通る娘様に

雀はすどめなり

最近の希望であり、興味でもあるのです することです素ツ裸の自己の魂を摑ま たここ、それを自分の姿を完全に、快出 へてるます。最近自身で最も興味を感じ す。きだく へて、それを克明に、表現したいのが がしかし、それはいつも失敗に終りま 自分の正體・・・・私は、 一安師 跡が、見いるのです いつもこれを考 郎

引ずり出せな いけ 摑へて見たが徴はすどめなり 魂 こ、相撲をこつてゐるのが、苦しの魂 こ、相撲をこつてゐるのが、苦し 突かります 句 やうなので の中から、 出せな 衣 1 チ 0 、魂が痛み戦くのに、 その ラツ、見ても 摑る まへ 時の其の句から、 重に へるのが下手な故 6 包ま れ 自じ打ぶ 0)

Ш

こする妻、ほんこうに内職をやる氣か? やつて何時迄續くか?それが最近私に最 あまり 味を感じた一 (1) いしさ貧し つです さに内職 をやらん

3

給のたしは家内の手内職

日中雑用に追はれ勝ちながら瞬間々にいっている。 詑 猿

> 柳的良心はその方にかたむいて居る様で物なるものが多い様です。強いてそれをがなるものが多い様です。強いてそれをおむこ云ふわけでもあこませんが私の出れていますと ある祭し 翻ぎる てそれなく投句して行く事は非常に興味な又は默想の内に浮んで來る句をまごめ いづれにせよ名吟一句を残すまで奮し、いづれにせよ名吟一句を残すまで奮った。

朝星をいたゞく父の老け しませう。 T 見

is

大典餘

義太夫の坐り直ほして唄になり やれるだろう位で決めたプログラ 吟に依つて當時を偲ぶ事にする も興深きものであ

世

かり一生懸命になって機震を探してるるかり一生懸命になって機震を探してるるかり一生懸命になって機震を探してるるかり一生懸命になって機震を探してるるかり一生懸命になって機震を接近なる。拾つたたが、ここはい顔をされる『海は機がなったが』ここはい顔をされる『海は機がとれる『海域を指揮を選集してるますので……』三震を強いてるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり一生懸命になって機震を探してるるがり、 或る春のここ隣票の一番会と書 大きがないろうと、こ人にも聞き自分も考へ をいるからに、ころにも聞き自分も考へ をいるが、一手の階上。電車内を にありすれだあこならば全國よりいろと 馬のすれだあこならば全國よりいろと の人が集まつて落すご思つて阪神電車の でいまる、一度に馬券圧が耐つたあこは となる、一度に馬券圧が耐つたあこは なる、一度に馬券圧が耐つたるこは なる、一度に馬券圧が耐つたること をこなる、一度に馬券圧が耐つたること をこなる、一度に馬券圧が耐つたること があった。 でいる。 でいる。 でいる。 の人が集まつて落すこ思って をいる。 の人が集まつて落する。 でいる。 でい

龜代子の表情

丸が暫くは降りなんだ。

A

0)

たかビ情ほい 1 夫つ ミ ば んズミね さ編いんの 和 けむふこん つ柄脇 出めに息 送 步たは置 3 きあか 頭 < 針られ 3 でいるのかけで 髭を刺り ない は似し 女 に似し 女

安

井 U 3 L

無指き針母風持 石能のび箱ののつ 白だ 手まて ののに死 云 3 2 夫は 物算ま ね 3 れ 散か 思節っ 3 へば夕近し の高さにも 生 は 値 专 蔭 を れたのさ を見較べるれたの さ П 見 0)

借信 金 用 のを 多な 3 T

< 氣 樂

矢

田

冷 3 0

刀

な 3

太 M 朝

陽

11

な

ひ黄

3

3

トの喜太 (三句) 掌 to ++

四

年

To た りび 息がな人 のれの電轉 金 耳明に死返 あた一車の勤 に日拾 ご踊 につ せ 子 な迫てだば つる海師 To っての岸走酒 T 綿女か年の 焚 いう 母 のかす花入來拾のが のま れずひ空き 顔ちり

0

嫁く

入た安宅

轉新

は秘

を

遠

子開海夏借

の広岸

寢

L

が

葬お一十大

へ度行月座

ひ百

重でく

荷帶も

人

ならぬこの

子ける

柿電二笑風

へ燈人はの

來のませお

る下でてち

迄にあ去る

郎 路

濟

ま

な

V

が

吞

ま

ね

ば

張ユ

12 1

拜マ

みイ

倒の

し上

てに

地梅

買の

友大口

達衆入

をへ屋

1

いなな 0) かろり

T to

b 地いが

た

位て

真お

理前

2

繭藪三

玉入 ケ

つ歯は

る 痒 開

此晴な

の着い

\$

くけ

£

子

り日 をに藏

> 洗 目花墨 双白 濯を電の 方粉 屋覺車值 でを 所ま牛を 座落 をせが云 席せ 聞ば引ふ 譲ば け妻いて る黄

ばのた 書 知らぬき 年 橋

て子は庄ら

下にの叛途 の、るん頃 ちをだほ し短ミのあ ら親心ひ T か観塵る ば類を母 いじをの <u>ر</u> لا る別知の川ら ら音 金酒が默 山ろナれずが合かこさしす れ を を 見 り か二さしす た借呑付込萬 ミいそ賀か 掛な 悟な月せてる 舟娘りみけみよこきう狀ほけ顔

郎

三七

見正看得惱上坊 一血ビま新 善親抱三別 温版 握のルた築物を て月護策ま役主 人差き人れ 情工. 居にごこしがも て淋 合 は ののエ そ行 ふがは れウ婦知い のじンーバ 塲 3 ばンでつ事 砂むグ錢ラ ら見て曉淋な破荒の 温む縦い埃 香ミーて聞せを に魚のにス 豆れ居へし 具寝生かきば出 もを風 1= 3 43 IJ 似ば三まっ 懲女に針の 泥言 師る終女飽懸る = 旬 し伜人だ云 鰌 葉 は氣る房い がは袴箱音 松一で者無てをか あ立をのも橋指がを手ふ をの 木を憎見を氣 上快 りつ吹 煮正 ふ出っが そてきで 3 づれ無なへ氣は 出よ二持な 如直 しな通 せるしりるのめ なるるしし柳ちりぬぎひ しさ

外上極竹子母 付 ん月馬守の を屋っを父手 き頃 屋ころがになった憶に ラ言根う小びて 3 ナふへふく ツヶ先ミ乗 せ落り 7 し反逆になって等の。 演のじ服 見し水味みよ

子

制卒 柿 落笑裏 葉は切 服業 實 掃しつ 本 のに くたた 願 迫霧ご女 綻 近 家祝 のこ手 3 U 5 0; 中がま に梢 或 か試り 冬が 旗 ら 験 の か 迫 淋 咳な様 有 つし

て過

居ぎ

人

靴 F 冷 た 寺 本 願 難

寺

L

明 正帝 大所廊寺 に見下に 裸 像 立 0 T る

公

落

^

息

子

煙

0)

<

輪住 te 田 0 り割 3 耽

服 6 3 た n 女 給 0 何 をつに井を 聞るるが二

南

支

那

う今嫂 商二京 愛 氣 壁 夫 出 友 寒友醉立 このこ 賣階へ想 のをに世に さ情つ候 うだて補 で な忘 ◇がれ問し叛 く境他來のて子 にな居す いたへたい しごるれ な地人た方嫁を 事あば話て るに行北がに褒 て」おば をわ 古 客さ もめ 友妻儀國よ珠た 話た道の童 着度に 貞 手やのでく数の しょ草横の 屋々五む てるります。は軍 , ので夜水 土要を蟹ミをが朝 の驕幾き 産るつをうふか か 高 うふか田にきなを更谷ごら 無間 ひ生りつけん へべり喰ぎむし にさな産 るきけひんらて新 り活しぎる鮎 ちれり薫

病恩

室給

0

3~

わ個

ぎ性

こを

別ま

壽金

舟

香

髭に山福る村

にけ越

水

卜內

口職

ッの

をに

押す

しま

てな

るく

の葉食るら笑を行持

子杖せ日し太ちき孤草釦加

郎

切し失 次書へ 藥 生 の置ッ れり線 代 活 るあ 嘘 煙の。 に 氣かの は 草上云 でを骸 來氣云 ににし たに、 待 っ指た のしな 大 + 阪 へてつ も輪級 te 愚がの中 41 後 酒せて 月 野かり児 を出しる二度の母 Ш は島 な光し 眼 す 995 街隱 子 洲 柳

堂

美

こ残

2 1

5 to K

かし氏同

ら壁時

このに

1樂兒

ま書

で見

を失ける

11

\$

何

方

友

す淵

か貴

Ш

氣

病滿そ病南 床壘の室國 見のの を~舞裏旅 ♦ コ母 恐面母のか 白看田ッ みパ 見い護んメ たナ婦なの 隣ミに苅親森

= 九

雪 釣 履 憂お J A 募 宿時夢 小か口熱絶 1 3 包ま語情望 の錢歴 欝困 集 命のに 心 積の書 をり 動ん 昌 0) \$ でご まひ見 をり文生知 くに 又〇 むなに つで 開のだきら たせ た まる 話い音 ッ き組 は猛けてず ~ 5 をめ 7 土へ沙 3 本 1= 持て 然 y 產贖汰 Č も子に ば迄 ばご父眼か 1 も繰の つ女 箱 せが て給 涙し親ミせ 吳りな 火 1 金は で増着 に言中るの でて承はて 見中れ間い松 死 る氣 凹吳 藤むん知みれ 野でに二並突て見賢が丘 T つ田 2 でゆき 土でせす る合週 當吳 夫 輕 け柳 思 産 きずぎ ぶ 光りれ光人い町て一 行きく戀 るせ間 陽 哉 路 陀 路

嫂悲き人

のしつを

愛をりて

想こミ程

笑ら利よ

氣た拂を

入らずが 継続

秀

云

0

みちし

愛貰口歸叱か同大女相 すひ元るらたじ臣事性 れ子が日れみにの務が もへかた分手名愛 なの見こ け織も想 5 渡ご無 書が そい字 0) 女 着 あにに t 過 御ひへ子い な女なすう 影がてを事 着てぎ 5 無いこでけなしつけも博士なりを様士なり 房つ限れ無て置て 0) E 長にユダ 酌 をが青い 샮 柳

健病子娘 論額 か妻のご なの手同 ッ の曲 頃這紙じ はひ學着 足つ け出資物 がて てのの か 近」 な來こ行 しるこく づる たをはを な **叱**末娘 天りへが澤 て田 王し 理つ書知 教けきせ

峯

水



金玉の文字を顧み

---川柳雑誌第一卷より-

安井ひろ

びをもつてゐるものである。此の川柳によつて後へご語らんごする歡

の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的言葉である。なんこ我等の川柳を、社會言葉である。なきまである。ないでは、一般の川柳を、社會に示さらこする意識の燃んて居る事であらふ。我等が川柳に親しむ所以も、我等の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的の川柳が如何なるものであるかをも、的

さするのも意義ある仕事で思ひ、僭越ながら

紹介の勞をさる事さする。

は決して短くはない、創刑五週年を迎にて川は不必要かもしれない。然し五年さいふ年月

々には前途あるのみで、過去を顧みる事

柳雜誌々上の先輩の言葉を顧み、研究の一助

・刺戟に生きる現代人に川柳の適切なる。刺戟に生きる現代人に川柳の適切なる。 東北の一様のの一様のの一様のの一様のである。 三川柳郷誌の使発する事が必要である。 三川柳郷誌の使発がある。 一種の一様のである。 三川柳の適切なる。 「はいいいのでは、須らいのでは、一様のである。 「はいいのでは、須らいのでは、一様のでは、近いのでは、一様のでは、近いのでは、はのでは、近いのでは、近いのでは、近いのでは、近いのでは、近いの

▼一句を遺せ 麻生路駅-

誤れる川柳觀を排す

ぴちこしたこころを躍動させる短詩型ご俳句の如く隠遁的でない。人間味のぴち

柳によつて人生を的確に批評して行きた云へば川柳の外にはない。我等は此の川「現代人の思想にぴつたりご觸れた詩ご

「――川柳は短歌の如く貴族的でなく、いこ思つてゐる。」「創刊號。大正一三、二)

確に示して居るではないか、まさに川柳

雑誌の標語こもいふべきものである。

しては我が川柳あるのみである。我等は

11

py.

き力强さをもつて書かれて居る、柳人必らの修養ご努力さを説き、後世に遺し得己の修養ご努力さを説き、後世に遺し得己の修養ご努力さを説き、後世に遺し得己の修養ご努力さを説き、後世に遺し得 讀の快文字である。

病床にて一椙元 第四號大正一三、六)

が載つて居る、我等の心すべき數々が擧げて同じ號に、紋太氏の課題吟「叔父」の選後許 がはじめて見られた自然が、非常に驚異
紋太氏らしい謹厳な筆致で、病後の氏 味ふべき文章である。 て行くこいふ、淋しさを書いてをられる れて、身の廻りが、また元の平凡になつ いであつたのに、其後病がよくなるにつ

作家として一椙元紋太一二・七)

ある。一讀をするめる。

名文だ。 て居る。後人のもつて模範ミするに足る 氏の作家こしての、句作態度が説かれ

暑中漫語

ものではない。少しも無駄のない感ずべ 題は漫語だが、 (第七號大正一三·九) 椙元紋太 — 中々漫語なご稱すべき

葉いみである。

何故書くか〇矛盾〇句會觀 /項に就いて我々の参考こなるも る事〇論議する者〇

書かれて居る。すべて紋太氏らしい澁味の六項に就いて我々の参考さなるものが

が出て居る。 ▼彈力ある句を望む一竹內多聞

居る表現法に弾力を要望した一文である。
て、其時分から一隻眼ある主張をもつて
、其時分から一隻眼ある主張をもつて の文章だが、今日の英才多聞君だけあつ 数数あ 末廣博士の「暴政は人を皮肉な る投稿からぬいた、こいふ前書付 (第六號大正一三、八)

らしむ」を讀む (創刊號大正一三、二) 麻生路郎

載されてあつて中々面白いものである。 の未廣博士に與へた一文である。これに 新聞 して未廣博士からの返事が第二號に掲 大阪毎日新聞の前記々事に對する主幹 柳壇雜觀一脈生路郎一 e

第三號大正一三、四)

同様の感を深うす

▼時事吟について一麻生路

のが多いのも一関である。 なしにこれを讀むこ、何の事かわからぬ て、當時の數句を學げてある。今日説明 れるが、ごうしても新聞ものであるこし あるため、一般川柳の門外漢には歡迎さ 時事吟は難句に なり易いが、興味的で (第四號大正一三、五)

難句について一路 (第二號大正一

いふ話。 し、結局難解の古句は、折角解釋しても る あるこうかし 川柳研究階梯』の難解百句答案に對す 穂積博士親子三人の共同研究になる、 古句研究の誤れる解釋の仕方を指摘 こいつた程度のものだこ

これに對 東魚の諸氏からの反響が掲載さ し、 第三號に久流美、 久良岐**、** れて居

|| ||| 柳凉舟 1 西原柳雨

京み船に關する古句の研究的文字であるま、お、た (第六號大正 一三、七)

風 樽 邇 to

する山椒、 0) 異見が録る]1[柳雨兩氏の 3 IC されて居り、第八號に右に對けて、第八號に右に對する、同氏氏の前記著作に對する、同氏氏の前記者に對する。同氏 (第十號大正一 反響が載つて居る

でだっけが仕合せな御新されて居る。 「呼だ」は『呼出し女郎』等の古川柳 『呼だ』は『呼出し女郎』等の古川柳 『呼だ』は『呼出し女郎』等の古川柳 『鳴殺刀一で省二氏が當時から帰息に 『鳴殺刀一で省二氏が當時から帰息に 『鳴殺刀一で省二氏が當時から帰息に

▼川荒 柳彩 句 マの境地 - 吉川啞人 - いからなってある。 味ある事を述べた考證的文字である。

かるよう面白く、句の境地を述べて居る古句、現代句を引用して、初心者。わる。 入川入川 門柳門柳 雜吟 0 作り方(第二號大正三三三 (創刊號大正一三、二)

初心者に致へるに親切である。 いづれら選日莊主人、 森東魚氏の面白い文章がある。 自 然 0 第三號大正 路郎主 一幹の筆で 偶感 『自然の =; 5 四

> をす 向 1 になるま

▼質疑度をできます。
※答言なるもの多きを疑は
参考言なるもの多きを疑は 研究であ は るの _ E. 初心者の 1 七

ファ ンの主 = 一概句に對

里の宅を不朽洞こいふのご同様である。 里の宅を不朽洞こいふのご同様である。 は鳴尾の路郎主幹の居宅で現今の岸の こは鳴尾の路郎主幹の居宅で現今の岸の こは鳴尾の路郎主幹の居宅で現今の岸の こは鳴尾の路郎主幹の居宅で現今の岸の こは鳴尾の路郎主幹の居宅で現今の岸の する質問に答へたものする質問に答へたもの 日本主人の筆である。選日荘等によるできたもので、今日でも一般等の主義を示してある。以上のかれて困る問題に對し、明快がの主義を示してある。以上のかれて困る問題に對し、明快によったもので、今日でも一般に

選及選者 第八、九號大正 一鄉生路郎 三九二

で、 W 民 川柳入門書の草稿こして音かれたも 選の方法について述べ 謡ぶり - 川村花菱 られて居る (1)

正十三年を送る (第十一號大正 麻生路郎 1

其他第一卷には左の加まな持つた終始一貫い の断片ミみ 今日も治同じように云ひ得るこ思ふ新鮮 後の 感想ご 3 , 所说 ~ きものが錄さ 左の如き文字がある一貫の革新川柳心である れて居る。 する意見

○溪花莊にてー **(第五號大正**

〇川 趣味に生きる者ー を拾つた話 - 黒木羨豆 - (第八號大正一三、九) (第八號大正一三、九) (第八號大正一三、九) (第八號大正一三、九) (第一年) (第

金を拾つた話

0

○紅法師を悼む-橋本二柳子-(第十號大正一三、一) 尚 右の他に 號大正 三,1二)

年計劃 のこき迄のづる事にする。 ・ 本語の にあるが、第三巻にある一 ・ 表記であるが、第三巻にある一 ・ 表記であるが、第三巻にある一 ・ 表記であるが、第三巻にある一 ・ 表記であるが、第三巻にある一 個 の中に倒る の田中五呂八氏の主幹に宛た私信の日中五呂八氏の主幹に宛た私信をした。 上とも これは非常に問題を 1 田中次俊 3 -1

此年を送るに際して主幹の創刊

ケ 年!

次

ル紹介する



近作柳樽 素人提出

善人の無智に

苦しめられて生き 東洋鬼

出した。
出した。
出した。
出した。
出した。
出した。

が自分自身であるさ思ふ。「善人の無智」までが先方で「苦しめられる」のさ相手方を見たのではないかさ思はれる。にはゆかす、父その無智を肯定する事も出來にはゆかす、父その無智を肯定する事も出來にはゆかす、父その無智を背定する事とはの無智し、生きて居るこ言ふ風に解釋する。められて生きて居るこ言ふ風に解釋する。

ないかさ思ふ。き」言言ふ言葉で善人自身の事になるのではき」言言ふ言葉で善人自身の事になるのでは紋太……一寸見るこさうも感じられるが「生

紋太……「善人の」を「善人が」 さ言ふ意味にれる。これば言ひ方が足りないこ思ふったつたのであつて、善人自らの無智をうたつある為に苦しめられて居るさ言ふ 境地をうかつにのであつて、善人自らの無智をうたつ 善人の一徹ではないかこ思ふ。その善人のは善人の一徹ではないかこ思ふ。その善人のは善人の一徹ではないかこ思ふ。その善人のは善人の一徹ではないかこ思ふ。その善人のは善人の一位ではないかこ思ふ。その善人のは一般ないが、と言い意味に

になつて了ふ。
まつて了ふ。
歌うけりられる譯にはゆかない。
歌うけりられる譯にはゆかない。
歌うけりられる譯にはゆかない。

たのである。 ないである。 は、却々佳い句だと思つの見方で考へる時には、却々佳い句だと思つの見方で考へる時には、却々佳い句だと思つの見方で考へる時には「生き」が朦朧となる。

山雨樓

れ」がおからい。 山雨樓 ― 私は紋太氏の説さ同意見です。

山雨樓 ……この苦しめられば、借金に苦しめはないかで思ふ。

ふその苦しめられださ思ふに、悪人の為に苦しめられて生きてゐるさ言に、悪人の為に苦しめられて生きてゐるさ言は、悪人の為に苦しめられて生きてゐるさ言な太……自分は曲つたこさをしない、正直に

場合の終しのなどのでは、第三者から見た山雨樓 ……自覺しなくても、第三者から見た本事に矛盾が感じられはしないか。 素人 … 善人が自身の無智を自覚す るご言

山雨櫻………も一つ感じが淡い。何んだか悟りよいさ思ふ。で作られたものさ思ふ。作者に聞いて見たら素人……東洋鬼氏さしては、僕の思つた意味場合の善人の姿をうたふこさも出來る。

れてゐるので、どうしても御兩君の說には賛素人……僕は善人の無智には隨分苦 しめらきつた人が、何んだかこう……

山雨樓…… 悟り切つた人が呼かける 様にも成できない。

れたらよいかさ言ふ こさは知らないけれごふ字が適切でないさ思ふ。他にごんな字を入苦しめられて「生き」で居るので「生き」さ言素人……『生き」が作者自身が、善人の無智にしの場合 餘り利いて居ないのかも知れぬこの場合 餘り利いて居ないのかも知れぬこの場合 除り利いて居ないのかも知れぬい間機…… 苦しめるさ云ふ字がき ついのに山雨樓…… 苦しめるさ云ふ字がき ついのに山雨樓…… 苦しめるさ云ふ字がき ついのに

紋太 ……「生き」さ言ふ字が詰り突然な感じつづめた事ださ思ふ。 素人・……「生き」は生活してゐるさ言ふ事をさ…… たこ言ふ丈の所で止つてゐるのが惜 しいこれられて「無智に苦しめられて生き」こ受け且切れて「無智に苦しめられて生き」こ受け見切れて「無智に苦しめられる主言ふ意味ですね。さう言ふこさしめられるさ言ふ意味ですね。さう言ふこさしめられるさ言ふ意味ですね。さう言ふこさに皮々遭遇しながら生活して居る主言ふ意味ですね。その意味を句にしやうこ思つて、このらぬ。その意味を句にしやうこ思つて、このらぬ。その意味を句にしやうこ思って、言ひ得した。

ふのは「生き」さ言ふ字の爲ですか。 素人 ···· 僕の受取つた意味にこれな いき言思ふ。

ての味はひが少ないさ思ふ。

(は、単に報告的な句の様に思へて、句さしてさうされるのです。素人さんの取り方で言僕はさう取るのです。一まり句さしての見方で言の味があるのです。一点をはなしに、全体に紋太 …… どの爲こ言ふ事ではなしに、全体に

てくる様な氣がする。 でき思い、自方の思つて居る事が消えか、つださ思い、自方の思つて居る事が消えか、つての思いてゐるこ、成程さう

山雨樓……ごうもこの句には、何か難がある

叙法の方に.....

伸びてゐない。 伸びてゐない。

外に方法がない。 作者か、選者である路郎氏の意見を開くより 紋太……ごつちにでも取れますれ。この上は

さう人生の事がたやすくわかるもの ではなさう人生の事がたやすくわいて、からいふ感じがする。何んだか人生の事を悟つた様な日接いする。何んだか人生の事を悟った様な日接山雨樓……これな句について、からいふ感じすかれ。

20

よりも、川柳さしてこんな所がよい所ださ思

それを無雑作に言ふ事になると、社會の有識

0

を言ってゐるかにこられ易いこ思ふ、俳句に大きさ深さがあるこ言ふ事な、職つた駅のに大きさ深さがあるこ言ふ事な、職つた駅のに大きさ深さがあるこ言ふ事な、職つた眼のに大きさ深さがあるこ言ふ事な、職つた眼のに大きさ深さがあるこ言ふ事な、職つた眼に一考したいさ思ふ。 强がち この句に就いに一考したいさ思ふ。 强がち この句に就いに一考したいさ思ふ。 强がち この何に就いに一考したいさ思ふ。 强がち この何に就いてつて一寸申し添へて置きます。 。 此時ひろたので一寸申し添へて置きます。 。 此時ひろた氏出席)

紋太提出

充分に

母のもの 松

びろし――この句は穿ちすぎてゐるさ 言ふ 提げて暗い道を歸つて行く姿が見え る機に 思ふ 言ひ方が少し穿ちが出過きてゐるかも 知れぬが、柔かな言ひ廻しが私の好きな所で 知れぬが、柔かな言ひ廻しが私の好きな所で

も柔かくて、快感が興へる こ言つた様な事られるのは、ひろしさんが言はれた様に川柳られるのは、ひろしさんが言はれた様に川柳られるのは、ひろしさんが言はれた様に川柳のない。ない。 からはない 高はよく判つてゐるが、矢張り山雨樓…… 句意はよく判つてゐるが、矢張り山雨樓……

四五

のにしてみれば、も少し切實な表現が欲しい こ思ふ、本當の自分の生活感情をうたつたも 上げる事の出來る川柳の一面に缺點があ ふが川柳の句作になれて、課題吟きか句會 かに於てかう言つた心境を 容易にこさへ 2 の排斥す べき理由はない様に 3 思 75

事であるが…… か三思ふ。「母が持ち」さらた方がよいて言 さういふ技巧は 省いた方がよいのではない で「母のもの」こして この句に面白味なつち」で「母が持ち」では おもしろくないのち」で「母が持ち」では おもしろくないの よれてある以上、さうした見方によつて切實 雨樓氏の評される事は、この句が寫生的によもの」の見方が所謂川柳的なんであつて、山 ふのではない。さういふ事は断るまでもない はごうかさ思ふ。スケッチしてうたふのなら けたのではないかミ思ふ。こういふ 表現法 素人……或る夏の夕べの情景は 受けさるこ 味を求められる事は無理ではないかさ思ふ ひろし……「家へつくまで母のもの」と言 3

柳親なんだ、だからそこで意見の違ひが起る ふ見方が川柳の鸟上ださ言ふのが、從來の川 ひろし……つまりこの場合「母のもの」を言

紋太……つまり素直に言つてない、言言 ひろし …… その通りですな。 素人…… 作り方ぢやないかき思ふ。 從來の川柳觀ではなく、 從 一來の 111 ふ所 柳

> うさか言ふ様な句ではない。 ひろし……要するにこの句はぴん ご來さそ が常套的である為に、びんさ來ない樣に思ふ ふ意味なら、この「もの」 さ言ふ終りの二字 より道々は母の方が興味を持つてゐ るさ言 素人……「母のもの」の樣に見いるミか子供 だつたらそれでよいこさはないですか。 るのです。それは作者の本當のものが出たの II のもの」で言った所に作者の洒落つ氣があ 作者の思想の相違、つまり「母が持ち」を「 が起るの ださ思ふっ 而しそれ

川柳塔 ひろし提出

にくあんま歩く也

様に思ふ。事實に於ては按摩が眞直に歩いて たユーモアがあるさ思ふ。 ゐる己言ふのではない。そこに作者がれらつ 氣持で歩く按摩の姿が、躍如こして出てゐる ひろし……一見非常につまらない 事を言 様であるが、真直に 歩かう (へき努める

1:

す。 山雨樓 -- 僕は古川柳 ひろし はれます。 古 僕は古川柳にあり 川柳にはあんまの句は さうな句に思 1 いで

句に對したならば、大して心に觸れるものが

くらあんまがよく出て居るさ思ふ。 素人…… れてゐるこか言ふ理屈か抜きにしても、め (歩いて行つきよるな・感のよいさか 面白い句ださ思ふ。目の見いぬのに

> 面白いですな。 Ш 雨樓 さうですな。心理描寫い句です

紋太提出

泊れとも云はずあによめ

縫ひ續け

家の豊富な想像力から來る事で、卒直にこの聯想を呼び起すこ言つた樣な興味は、川柳作 事件的にこの句を見なかつたならば、只冷やの時の嫂の姿なり様子なりが 想像出來るが巧を弄した跡がある様に思ふ。勿論下五でそ山雨樓 下五の「縫ひ續け」に川柳的な技 かな感じらか受けされぬのであつて、色々に 場面を見る様な氣がする。 この心の葛籐をうたつてゐる點で、短篇の が兄の留守へ行つて、餘り好意を持たない娘 た應接間」で言ふ句から見ても失職してる男 ひろし……この作者の「求職にひんやり よりも聯想に興味が湧いて來ます。 が髣髴さして來る様な句がよくあるが、この たかさ言ふ事か想像させられて、句そのもの 句を僕はさうださ思ふ、この作者がどう感じ た様な句であつて、その中にその作者の面影 紋太……作者が遭遇した事 を、その儘報告し きん

紋太……作者の感情がちつさも盛られてな れごもこういふ材料を冷かに捉へ來つたさ れた丈のものだミ言はれても仕方 がないけ い作法ですれ。短篇の材料を十七字に纒めら ない様に思ふっ

事は見る人の相違で、さうとばかりはされな り出てゐる
こ思ふ。冷酷な嫂かごうかと言ふ 素人……この句は杏三君のカラーが はつき 言ふ所に價値を認めたいさ思ふ。

兄さんは留守に違ひない 紋太…… 兄さんが居つても差支へないよ。 氣のつか的嫂で見た方がよいで思ふの論

ださ思ふい「縫ひつゞけ」も上の様に別跳へに 跳へだけれど「縫ひつゞけ」がレデーメード 古るされた言葉に頼らないで、新しく言葉を きやられ やうな苦しさを覚わる。從來使ひ 紋太……さう言はれるさ私自身が ぐんく されたらき思ふ。大變惜しい事だき思ふ。 素人 ……「泊れこも云はすあによめ」 迄は別

言ひ得る。兎に角從來の言葉を使ふ場合は多 切であれば臆せず使用しても 差支へないさ 居る。それから從來の言葉であつても最も適 るが非常に苦しい事である。その苦しみに堪 いに自重したい
き思ふ
の織
脱 革則配 いる事が作家の精進の道である 事も解つて 生むさ言ふ事は實際さうありたい のではあ

安]1[久 流

× 月 × 日

濕ほひあり、御大典中よく降つたここを ねて、脊戸の落葉を掃く、落葉にはなほ 去らないが、氣分よし、七時過ぎ床をは 思はせる。 けふは禁酒して二日目、左肩の痛みは

うれん草のしめたのにケシはかけられて ある、朝のめし。 ほうれん草の味噌汁は旨し、同じくほ

> それは久しぶりで舌ざはりがよかつた 誰かの句に 晩酌の一合で足らぬ秋になり

私はそれを裏切るのだ

こ、妻はいふ、それにも及ばぬ。 て造つた、靜かに晴れた朝である。 しかし寒さはキッイ。襯衣をあぶるか 八時半、私は郷子の清書帳に名を書い 朝めしの二杯で足らぬ下戸になり

じめた。バットの煙り、それもなつか こ」ちよけな雀の聲をきいて出社する しい紫の渦である、茶も又美味。

酒をやめた、きのふから煙草をのみは

X 月 × H

禁酒三日目、霰たばしる日なり。

なし。 めづらしく朝風呂に行く爽快いはん方

めしうましっ 大根質るふれ聲漸くふわぬ。

× 月× H

を見る、 朝風呂に行く、ゆうべの俳句會の作品 けふは日曜。行く所なし。 なつかしいパットの煙り生きてゐる

冬の雨温室へ傘傾げ行く 石蕗の花もぐらの道の土黑し

て莨、それは私の自由である。 川柳屋また俳句に趣味を有つ、 進はきし行火を干せり冬の蠅 酒べめ

(十二月三日記)



句

年賀狀氣性がみにる書ッ

賀

ち 0

蛭

東小笑新丸六人 東狂子坊 たけし 吐句坊 年賀狀國ミ叔父ミへ丁稚 出小正月御無沙汰ミいふ賀狀來 年賀狀京都の宿屋からも 年賀狀變體假名で組母は 年賀狀寢床へ子供もつて 年賀狀ろくでなしから母 先代の名前で居く年奥様の知らぬここから年 年賀狀虚禮
言いつた書つ 今日はもう書く人もな 去年こは文句の違 細君の名言 女房に似せて賀狀をかいてや 屠蘇に醉ふ枕に賀狀束に 年賀狀まばらに配 方に肩書のあ 年を知 あ ふ年 3 3 年 裏 い年賀狀 0) くる 6 狀 3 0 是 内匠守 黑天子 水菊 鯉 峰狂緒舟萠民

年賀狀松がこれゝば燒棄年賀狀去年 の 分 ご 引

合 賀

成功をしてゐるらしい年

昨年の賀狀 年賀狀二階

な

0 0 達筆の賀狀を指 年質狀態友からは洒落。 年質狀また届いた三二人

で真似 8 T T

> 3 < た

へ宛てたの 鐵

年賀狀販路廣さにほくそ

笑み 賀

狀

こ 坊やの書いた質狀

ŀ

年賀狀からしておいて目を通し先生へ年賀の一句 墨 を す り

解散を見越して年賀狀を 年賀狀伯父珍らしく歌を

増か T

ろ

さる。 方がよいこ、樂屋で詰したようなわけで の事務的方面一切を受持ち、只默々ミし は大蔵大臣の稱あるこほり、 めに預りましたが、これも默々こして社 てるるのは賢明な遣り方である」こお褒 それから「いつも獣々こして、社務に勢 けて居るこお考へ下さるのです。 ム安井ひろしを橋本二柳子ミ書き換けた 務に精進されるのは橋本二柳子氏で、 力を惜しまぬひろし氏を内務方面に配し 若く見て頂いてをるのです。 い人達で、 けて見いるこ印さる」方は、私よりも若 ばかりで、老けては見たないのです。 みて下さつたのですが、 私のほんこの年を御存じないので、そう このお言葉、誠に恐れいります。貴方は が如くして若いのが、ひろし氏である」 人のいやがる仕事を熱心にやつて下 若いようで、老けて見た、老けたる 一月號の「路郎氏を繞ぐる人々」で、 貴方のあの文章はソックリそのま 自分こ同い年位にしては、 私は若く見いる 川柳雜誌社 つまり

年賀狀丁稚 年賀狀孫が揃つて假名で 年賀狀始めて父の 年賀狀書馴染の妓 昨年の残り で 妻 六朝がごうのこうのこ賀狀うけ 年賀狀後添の名も 賀狀書き妻も四五枚筆を こ り 旅からの賀狀のんきな歌をそに あれも達者かご賀狀に目を通し 書きたがる子にも出させる年賀狀 近況を賀狀の端に赤で 言譯を添いて後から出す 0) の親 交 C の年 書 を 分 3 か \$ to か か か 狀 专 狀 3 左之助 突支坊 天岳坊 X 水公 ん坊 帆枝

年賀狀英語も交ぜて姉 年質狀名士からのを持ち 寺からの賀狀一句は自筆 まだ恩は忘れて居らぬ年賀の詩 片假名の質狀は母 末の子へクレヨンでお目出度う 炬燵の火消を賀狀をやめにする 十年の交際質狀丈けで 計算を賀狀の端に書いて 票を賴む準備の賀狀 を喜 な ば すみ < 出 3 0 Ė せ 吐句坊 たけし をさむ 露路 萬 竹 鮎 斗 樂

> 年賀 落選の方からもく る 年 雑煮箸持つてうけごる年 全快は主治醫の賀狀目もくれず 年質狀子 年賀狀隣りの子から假名でくる 引立てもろうつもりの年 代議士の年賀長屋 碁敵の賀狀大きな文字で くる 年賀狀紀念切手も貼つて ニア人の手で里へかく牛 年賀狀見てゐる内に燗が 気のあはぬ兄貴も年賀叉はくれ 手のひらへ母が教にて年 温泉に居るスケッチの賀狀が來 狀恩即 猶かき添わ 供同 出も 4) か 賀狀 始 は 風流子 綠之助 吉五郎 月 葉 浪 = 天 水 水

代議士の賀狀活字で埋めてゐる 年賀狀老師へ妻の名もい 年賀狀他人になつ た 年賀狀醉ひつぶれたへ戻つて來 年賀狀氣易いごこ は 妻 年賀狀去年に變る 兄 年賀狀妻の里から 年賀狀鳴鶴の書で 年賀狀母文け筆をおろす 女 0) な 0) れ < 趣 路白洲 内

> 次に「 誌の句はその當時よりもより詩的に進步 思ふのです。 入ます。私共川柳雜誌は、 る事を語つた」
> ミいふ仰せは、 完成に精進してをるものである事を申し それらを經て今日に進み、尚益々川柳の 方の して居る事を、信じてをるものです。貴 居るこは思ひません。むしろ私共川柳雑 もあるのだこ存じます。私は大正五年柳 なご」考慮するこころなく、各自得意の 穩健に個性を尊重して、良いものは何派 事勿論です。ただ柳界の中心雑誌ミして さぬだけで、路郎氏の所謂生活派である りも、新鮮である事を理解して頂けるこ ごお讀み下されば、現柳壇のごの雜誌よ の革新を期してをるもので、近作柳樽な 私共の過去にすでに通つて來たもので、 なるものが、その當時のものより進んで 珍堂在世當時から川柳ごいふものに親し 方面に伸びる事に勉めてをるので、誤解 んでをるのですが、今日の所謂新興川柳 「新傾向川柳運動」云々のお言葉は 詩派の川 ただ新興こか、革新ミか甲 柳に相當の理解を持つて 明らかに柳外 少々痛み

あけて御好意を深謝します。

重役の質欺勤め 正に賀狀をよこす乳母 0) 外 0) か 里 3 笑 秀

恩給に生きて賀

Alt

to

堅

苦

L

柚

蘭坊

玄海が荒れて人港 沖合 遊廓に近し港は暮 流さる」ま」に港は遠 騒しいまゝに波止場で笛 港 渦卷を残して汽船出てし 波止場まで深なごりつ 碇泊の港に もう港水平線にか 船酔ひを心配しつ 港に氣笛が鳴つて 夜風に避難の船 見し出した港に船 箱庭のやうに港を 港内に遠い母 / 焼に小波が立つ 一階の対遠く見せるは港 から 員 かしい港 の港方 港の船 は 雕 本 港 tu て家 雨 < もか は 194 6 へうら 出 見 1 0) 近 ム船 り日 は遅 3 波 n < 林 船 馴 111 T 0 港 ŧ れ か 5 4. 1 C が 波 3 5 3 を聞き 涯 < な \$ ょ た な な が 1. 乘 屈 か 見 あ 0) 0 0 0 0 0 ワン公 假名子 突支坊 路 柚 一句坊 秋 郎 美 F

久し

振り晴れた港に帆

が

並

橋 本 柳 選

船醉 新年 港には 港池 波の音ばかりに港更けて 佳)媚を賣る樣に港は灯 ットした顔で港 へだんだん港 港 3 一艘 Z ŧ 朝 \$ 0) な 港 U 0) 近 H ŧ 土を S H は 靜 がごもり な 水 來 近 踏 なり 0 晴 内匠守 潮多浪 風 狐 東 VIC 批 舟

る様お願ひ申します。

ご存じ、

その芳名をこ」に掲載する事に

何卒新讀者を此際御勸誘下さ

(二柳子)

致します。

要塞港風景 港出てだんく闇に向 警報に船舶じつミしてる 賑かな港の 港まで外たが駈落おさ 朝 E よ な 4 .5 所 てゐる な 6 な B 0 (1) 新 天 岳 坊 波 也

港まで來たが行先 なまめいた音がきこわる夜の 船酔ひが港に入つたなご 上海港支那人だけ三思ひ 檢疫がすめば港に灯がご 合圖に無事を斬り 迷 す U 港 U 思 L t 0) ili 0 0 夢 英賀夫 湖 鐵 洲山水萠紋

誌 友 制 設 <

なし本社ごの關係をより密接に致したい代前金壹圓八拾錢以上拂込讀者を誌友ご 加してゆく事は欣快の至りです。 今回誌友制を設け、 柳雜誌も滿 この關係をより密接に致したい 五年を迎に益々讀者の増 川柳雑誌半ケ年誌

衛門、若井たけし、澤井朱唇子、清水柳狂、森里魚、石谷巨水、閩正道(岩本素人)△原田光男、前四正道(岩本素人) 天垣龍子(八木毒仙 井ひろし 子(礼扱)△前野貫一 昭和二年十二月一日より十五日迄 **筆野貫一郎 岩出無鐡砲(安たけし、澤井朱唇子、早笋恒森里魚、石谷巨水、關根五左森里魚、石谷巨水、關根五左、八上垣龍子(八木毒仙)△中瀬** (括弧内は紹介者

塲 時 新 春 月八日午後六時]1]

4

交叉點北辻東入 大阪市南區日本橋 丁 目

話橋 俱

沙漠の中に立ちて叫ぶ 紋付 句 南三 9 四

金 Ŧî. 拾 錢

郎

合せの上御出席を願ます 記念撮影、茶菓呈、同好の御友人 B 誘

子を連

生くれば

造はよろこば

甲板で港の雨に立

た

な

0

合

見送りのステッキ高く船へ振り 山が見へ港が見へて船が まつしぐら港の土のなつかしさ お別なテー 入港にランチが波を立てム來る (住)もう港風が吹うが吹くまい)帆柱の港ごなつて日が暮る プ鬼く人それんしの思ひき ポケットに銀貨鳴で港の夜 ブ切れても握つてる 同 同 III 菊

たまに來る港に波が荒す 來て見るこさほごでもな 持主があるこは見いぬ船 棧橋へ着ける汽船の手間がこれ 燈臺が見らて港は 七三五繩の港の船は静か (佳)思ひ唆る港口の灯が搖れる)あわばランチに搖れるか まだ遠 ぎ 0) T 同 百 水

聲

付

句

受付にこんぼこまつたま」の書 コソノーご入るへ受付こがめな ばあさんの獨り受付でひまを与 6 お \$ n 0 天岳坊 露 nt. 句坊 紋 受付へ斜めに立て た 組 受付に聞けば先月ぎり で 馘首 もう一度聞けば受付窓を 受付は欠伸しながら此方 受付は規則をたてに頑固 受付に氣忙しさうな顔 受付へ保険の取れる年が 五時を待つやうに受付〆ちまい 心服でない受付の 笑 ひ 伸び上りつく受付へ押されてる が 閉め 見

0

突支坊

共 選

警察の受付へお辭儀するばかり 二柳子 女 した。 柳

賞者二百名の句は「週間朝日」について御 り第三席迄の句をこゝに轉載して本誌讀 別號で募集された川柳「新妻」の第一席よ 尚引續き「川柳」を募集される事になりま 質を願ひます。 者の参考に資するここ」した。その他入 大阪朝日新聞 朝週日間 懸賞 一社發表の「週間朝日」新年特 四六倍版定價參拾錢。 111 柳 0 發 表

内

題 生路郎 選

應募句稿二三、七六四

通

第一席 新妻の煙れる中にみづみづし 吳 क्त 山本 忠義

木偶人

手柄さは一家を明るくすべし 貧しくさも新妻のほゝ笑みさ赤

第二席 奈良の春糠煎餅を嫁抱 高知市

古調なれど情景の葉て難きを探

第三席 新妻へ斷わるすべを云つて出る 當惑するこさのあまりに多き新 京 城 橋本 言也

狂

Ti.

妻の生活を摑み得たり

强談は受付なごに目も吳 受付を勤めて鰥夫

受付の唯はい人〜三二三ぶ 受付がひよいこ見上ける名刺に 受付日く大てい人相で判ります

な

売書こも知らず受付帳に

受付へ叮嚀に辟儀し

女

受付は動八

等の髭を

受付に三ツ目の窓を教へ

見慣れない客へ受付目が 受付は窓から首を出して 受付は名を聞てから叩頭

受付に欠伸の 順番があつて受付揉め面會の女受 付 は ふ の年後 の俺に 1 は夕陽まごもに受け C 0) 聞いた通 のつい 送られら 訛りをなつ 受 來て受付 時計の 付 0 0) に 優 だるう鳴 へうろたへる 突 か て れ 1 てゐる す 3 廻 か 0 0 3 0 ぎ 0 3 穂同桂同亂 波 子 風 耽 同た町 同 竹同 孤同柳同

受付は窓のノックが氣に入らず 地)受付の子が級長を押し通し人)へつた。椅子に受付老は行き 待つ、受付齒を 馬鹿らしい三味の音 一人待つてゐる てコン 寒う ヨン萎むて居 せんり 待 模 7 柳湖菊青 伴津內孤町光豆 葉匠 秀山三水內佐守舟二路秋

大あくびして受付の書き、受付の午後の机へ 陽 が 受付の午後の机へ 陽 が で 受付は初診に軽くペンを せ

樂局の窓へいつも

のら

當書執包は

受付へ母ミ來た日の受付が社長叱つた。

渡行みな

受付が窓か 受付のあく

仰

4.

かべ

何が立てばクッ

ッシ

受付の横眼

女

受付ひよ

11

のもう

受付は官僚的に受付は動八 ひこくだり書い 厳然こして 受 付 天)もう時間ですこ受付逆らな 大の)運刻争ふ受付に湯がたぎり やうに受付 僚的にも て受付顔 を上 云をい 琴好 選 人次

軍隊の受付娘からかはれ受付の巡査へお辭儀するばかり受付の巡査へお辭儀するばかり受付の巡査へお辭儀するばかりで付の巡査へお辭儀するばかりのみ 受付は心得すぎて 呼 びりつてる事を受付 き ムむつかしい姓へ受付念を 親切な受付書式に 受付は何も云はずに帖を身の上を話すに受付筆止 をび 入返直押く 8 桂光銀南桂天言左虛琴東夢江裸千太雨鬼竹高津黃露一 岳 2 狂 人 枝菊水窓風坊也助白女子谷帆坊鳥路月樓堂峯佐彩斗舟

期

間

月十

Ŧī.

電話本町一〇四六番

短

拾枚組

盡仙紙裏砂子 盡仙紙並品大名 盡仙紙並品大名 大色紙 短 同同册 枚 六十五錢 九十七錢 九十七錢 九十七錢 一十五錢 Ti. 十三圓 十三貳圓十錢 八十二圓 世 養 錢 付 也 錢 砖 枚ニ

が終へて靜かな窓ご な りを次の競技へ呼びに 來 るが馬鹿らしくなる三味の音で幹事は世辭を云ふて去り 6

內亂好町鶴柳雪鐵 匠 守耽次二峯笑峯三 受付が立てばクッション受付ご共に時計が 古 と受付の閑は同じ文 字 お

がを < V 表で居

な凝書 0 りき

光孤伴柳 路舟內秀

へつこんだ椅子に受付老皇行き 湖 山へつこんだ椅子に受付を遠ざか り 風流子 受付は國の訛をな つか しみ 柳 秀 と出した事を遺憾に存じます。 一點句は多くの類句中から良いこ思ふものを抜いたのです ニ點句はそれぞれ特長のある、味へる句だご存じます。 しゅう一度聞けば受付窓を しめ 水 聲 としいふのがあり「受付窓を閉め」は暗合多いふのがあり「受付窓を閉め」は暗合多いふのがあり「受付窓を閉め」は暗合多いふのがあり「受付窓を閉め」は暗合多いふのがあり「受付窓を閉め」は暗合多い。 しょう しょう に といるのがあり に で は かい と いるのがあり に で は かい と いるのが と

つくりこ思ふのがありましたから御注意 採録されて居るものですが御投句中にそ 尙御參考までに、左の二句は一萬句集に採つた。 申します。(ひろし生 受付の診かんミ居るは居る受付へ來て名代は嘘を云ひ 太郎丸

御用品

到る所の薬店化粧品店に販賣す 本舗 高 伊 橋 盛 大 堂 堂

<u>Ti.</u>



二から四

Ŧi. 花

村

年を迎ふ。新春感想なくんばある可からない。 ずこよつて駄筆を弄す。 光輝ありし昭和三年を送りて、昭和四

のがあり、三大節こいふのがあり、其數 のこして尊ばる。三々九度の盃こ云ふ 由來三の字、三の数、古より縁起も

> こ出しの川柳狂句もあり 文珠の智恵もあり、居候三杯目にはソツ ん廻つて煙草に仕様こいひ、三人客れば

三神は嬲るミ詠みしおん姿

す子三人こいふ。諺もあるし、世の悪玉紙を運ぶし、子供であればあまらず足らば。 負ければ奢らせられるし、三銭切手は手 夜が更ければ月三更に到るし、三零での川柳もある。

歳は三唱する事に決まつて居るし、三べ あり、汽車の等級にも三等車込あり、萬 幾つなるを知らず、三度の食事さいふ事

> 伏の暑熱もある。 を三百三いふし、三春の行樂もあり、

に出る。 勘平サンは三十になるやならずに腹切つ 樣で貸家ミ書くし、三番叟は芝居の初め 云つて政友會を脱會するし、三代目は唐がはいるない。 て死ぬし、小泉三申老は久原がイヤだミ 高尾は三ツ股川で吊し切りにされるし

買つて來る間二味線で彈いて居る

ご云ふ川 たりしたが四月の廿九日になるし、 こいふのが入つて四大節こなり天長節のできる はないソレ、三大節の御目出度が明治節 此れにつゞい一四三云ふ数だつてない事 八月三十一日だつたり十一月三日だつ なら日本の三越 勇士、三陸の津波の話、デパートメント 入つたり三合もさけたりもする。元和三 お婚樣やら、明智の三羽鳥、悟道三昧 のがあるミキッミ出て來るし、三國一の 三多摩の壯士ミいふのは國氏大會ミいふ 事であらうし、琴も十三本糸があるし、 柳も三味線の三の糸で切れもた 後らでも数限りもない 四海

> 大きなが 誌がのれば大阪には川柳雑誌、番傘、 東京に川柳人、きやり、 ば四國もある。僕の愛讀する川柳雑誌も 波静かに平和を謳歌するし、三勇士があなるが、 れば徳川の四天王もあるし、 たまむしの四大雑誌がある。花札 すがめの三大雑

にだつて赤青よろしは三枚だが二十枚の 屋こいふ牛肉屋があれば、大阪名所に四キー・デスト 方が偉いこいつた形、東京四谷には三河は、 方だこ四光ミいふ偉いのがあるのである。 橋さいふのがある。三方目出度く納ま たこいふ事があれば四方八方にあまね 相撲に三役があれば四本柱に坐る男の

活版屋だつたら三ミ四の字が種切れにな 絃であれば ば四方拜こいふ儀式もある。三味線が三 き光りもある。 ヤあるワノー数へきれない。小さな ヴアイオリンは四絃である 昭和四年一月元旦こい

八苦ミあつてはかなわぬ。此邊で擱筆す 弄する三四方の諸彦から文句が出て四苦 り越して其名も五花村、あんまり駄筆を いのかも知れぬ。かく云ふ筆者、四を通 はざる、聞かざる、見ざるの方が或は偉 る方無難なる可し、呵々大笑。 然し乍ら、庚申の三猿でなくこも、

Z

粒

椙

紋

太

下手なここ此の上な天 女 飛 行 の 支那そば屋毎 夜々 脊笛子 ををを あ向吹叱 0 元

れを

けけき

外套を脱ぐこ 社火 吹 竹 熖 ダンスホール IE. 斜ひに 0) 煉 顏 瓦 作 長へ無父 0 網は觸地は 0) モれのそ | る帶こ で U 7" ニ人目へに が ンの立捨 5 グ息 てれ

> 野 鞍 馬

Ti. Ti.

は勿論である



に躍る人魚

友で人より聞いた話 ……少なく 亂 耽

突然襲ふたびが、この遊戯に加入を命ぜ クスに達してゐる所なのである。そこを 屋で、そのワイフは以前新橋に左褄をこ 若し鬼に突き當つたら顔は墨辰鮮やかな 達二人(一人は某キネマ社長の妾)合せて 或る日のが こも僕自身に面白い話である。 三人の陸の人魚達が疊の線を傳ひ歩いて て見るこ、主人は留守で妻君こ、その友 んだか馬鹿に騒々しい、で早速駈け上つ つてるた、 八である……の家を訪ねるミ、家中が何 なを强ひられるてふ遊戯のクライマツ ・ロイド眼鏡の岡田嘉子型の美 彼のおぢさん……大阪の株

> ……私は街のバッスルから逃れて、 を覺にた。大抵の日は、この三人が、麻 う所の句が…… るる。こんな境地の聯想から生れただら んに或るなつかしさを感じた事を覺わて 訪ねた事がある、 してゐるのだ。私は一度だけ、この家を 雀だの、花札だのをいぢつて一日をつぶ を覺にた。大抵の日は、この三人が、 達のうしろに、 なたはむれに我を忘れている美しき人魚 もう三つの骸骨が嬉しさ そして、そこのおばさ 有閑

「情婦も入れて花札の音」 鏡の裏で踊る骸骨

を數へる大世帶こなり卵を産み子を育て んで家の中に飛び込んで來て遂に三十羽 て、敢て求めたのではないが彼れから望 だ
ミ
拾
ひ
上
げ
た
の
が
、
今
は
友
を
呼
び
集
め は鳥か鳶に傷付けられた一羽を、 は無邪氣に、よく遊ふ小鳥である。 る私へ、云ひ越した一節、 す、ミは十姉妹の消息を、 張り廻はして遊んでる、仕方のない鳥で 昨日水童が動かぬ様にくくつておいた糸 いつの間にかほごいて、皆んなで引 懸命の努力ミ巧妙さも見た、 それほご彼れ 妻から社にる 可哀相 始め

> 事は罪がない三云へば之程罪のない事は、忘れて川柳に遊ぶ事がある、遊ぶ三云ふ 羽の間は盛んに交つて卵を産んだが、 を待つ風情、なかく瞠はり、小首を傾けて はる事も、 チクくし のあける頃こなれば、皆巢を飛び出して は有りの儘の生活である、霜に冷たく夜 食ふて寝てよく遊ぶのが仕事の彼、 なからふ、罪作らねば氣安くて樂しい、 情夫は情婦を、 家族こなつてからは、 彼等何んミ云つても幸福なものだ、一 遊ぶ事ご、 の天性は籠の中で空を見ぬが、 て居る、 をよく見知つて、 面白い事だ、私も時々妻も家も 小首を傾けて 食ふ事の外は何も知らぬけの 体裁を作る事も知らぬ、 ~ こ盛んに活動を始める、 見失ふまで、 1捨て難い姿態だ、 夫は妻を子は親を 餌を與へらるるの 愛らしい目を 遊びほふけ 其純真へ 彼れ それ

ものである。 十球盤の音でも知らず小鳥鳴き

だ、二人はいつも小鳥に起されて、

黎明は感應する。

目覺し時計よりは確か

にも買手がなくなつた十姉妹も、 な幸福さを味はふ、今日此頃は一羽五銭

又興味深い

用

鐵

中

11

間がそれ程に見てくれない。 二十一日登録の査定を受けましたそれが三月八日實用新案を出願して漸やく九月 の真の川柳ではないかも知れません。 柳には此頃なつて來たでしようが、私がそれ程に見てくれない。私の川柳もの川柳ミ同じで新案には違ひないが世 特許權肉親だけが賞めてくれ 修養の たりな V

れる頃、 目下の私には修養の二字以外に 貧弱さが解るのです 先輩の考案先輩の句言比較する度に私の 私の真の川柳が生れる事ミ思ひ 世間を驚かす様な新考案の生は修養の二字以外に何物もあ u

目を瞑り p 俺のたりない 事ば ti.

長をはくこなる三和服は裙さばきが不便きをお 女擘生てく。 まあこんなここぐらるが私が最近目撃し を着てる。やうに見いる、換言すればよ年頃の娘なごはよほご年の違ふ妹の着物 ほご御成人遊ばした~うに見いるんです 寸方短かく着ねばならない。その結果は ゴムの長靴を きます。スタイ 方では雪のある間は、 らやうに見わる、換言すればよ 男でも女で ルに重 Ш

ら三時間便所に立ちたくもなく又手近つた。而して私も亦廿五日の晩の九時かつた。 烏丸二條の知り合ひの店頭に坐拜すべく、午前九時半に京販電車で京都 た。敢て不省の愚弟にも出來る事なので あつた。(十一月廿六日午前十時記 にある、 この謹直な兄からみるミ、比較にならな 論すぐ行ける便所にもてムず、十四時間感激し、自身も携帯の辨當は食べず、無 い私も、 民らしい謹嚴 幸啓を拜觀して、一州奉拜者が、雨の中兄は、去る七日、京都に《て兩陛下の行 辛抱してゐた……こ如何にも忠良なる臣 で飲まず食はずに、辛抱して居る有樣に 居るように自認して居る、 ちつほけな田 また・一月廿六日の御還幸啓を お茶も飲みたいこは思はなかつ 舎の町を、 面持で語つた。 、私の賢明なる

舟氏の熱

四人の子達への朝夕の面倒、可成り逼迫のわかちなく苦痛を訴へる病妻の看護、 終日の勤務の疲労をものこもせず、 份醫薬に親むで居られます。 台 置が極度の神經痛に罹られ今

> 斯かる熱のある氏を會員にもつた北濱支の出來ないものが多々生まれてゐました此の間の心。は到底私なごの知悉する事 に際し一層の精進を續けたく思ひます。 **陸でよい體驗を得ました**」 三語られたが の病勢稍小康を保たれた折のお話に「お を得ません。秋漸やく深まつた頃御令閨 し句作を續けられた氏の真剣さは、 斯かる苦境裡に在つて絕にず の面目を想う言共に、 作句中に能く表はれて一讀讚臭せざる 6 やけの手から番茶を汲んで臭い」 昭和四年の劈頭

111 柳疲勞時代

感の力」に支配さる人人の意外に多き事 い時に、 其の何れもの句選に當る人達の中「 興味を引き起して吳れる何物も認め得な 派の遅々こして世まざる。こゝにも更に よこ觀るは强がち僕の眼こ心の錯覺この らず革新獣する今總決算三しての日く純 て後の疲勞時代三でも云ふのか、 拘はらず、云はむミする所を云ひつくし 各自信する道に猪突猛進すべき時 柳ミ染め出した族色の振はざる、 柳 詩 吾人各地柳誌を繙くにあたり、 非詩論は遠き過去ごなり既に 様だ。 傳統語 革新

成り行く所に幸ご不幸ご喜ご悲ごが生れ るものに初心川柳家の何パーセントが無 此の頃僕は選句者ミそして出句者の何れ 先入主先入感……習癖……第二の天性ご しこは云へないだろう。 する蓄電池の初充電ミ一脈通ずる所のあ 盲目なる者の多きを認むる時自らを顧み もが此の先入主に依る先入感の力の前に るのは否定出來得ない所である。

肝要なるを切に感ずる。神にあらざる人 間同志である以上、又恕すべき點無きに し」てふ先人感の一事に注意すべき事の て慄然

三する

三共

に先

人主

たる

「鐵は

重 しもあらずミは云へ折角の創作を先入感 段三興味を感するであろう(一二、五夜) に冷靜に味讀する時柳誌の句草の上に一 ろう、相互の注意を要する事であるこ共 もが受ける損害は蓋し少なくない事であ に累されて選する者選せられる者の何れ

女失禮にも當らない」この答べであつた この間ある假名文字宣傳の印刷物を讀ん なるこかが無いだろうか」
三同つたら。 で手紙を上げたら不便であるこか失禮に の假名文字に賛意のある先生に假名文字 一否そんな事は無い、無論便利であるし 興味を感じたこミがある「ある學校

> 息してあつた。 ミ漢字で書いてあつた」三云ふ意味で嘆 らその夏貰つた葉書を見るご暑中御見舞 だがこくらが所謂人間味の面白い處だろ 答べもしたのに結句お互が窮屈にして仕 ず苦笑した事なんです 私は讀んでゐる中に、その窮屈さに思は うごはつた 舞ふてある事なんです。 ごちらも窮屈にならない様に問ひもし、 然るにその先生に問ひを出した人か

のんびりこ新春の作句に耽るこせう 偶たまの和服に會へばひいてゐる

した。此の間人情の冷温を痛切に直感し 食客へミ人生の最底の境遇に蹴落されま 葉櫻の頃から病氣をスタートに失業から

越して榮光に輝く新春の太陽の光に浴せ 飛び上るチャンスをねらつて淋しい秋を ん三人生の岐路にたゝずむ浪人です。 在の身を心から��咜し再び歡樂の彼岸に て或は感泣したり义或時は不甲斐なき現 つ起きつ鐘ばかり聞く秋を雨

隣りの細君がうちの女房に髪を結つて貰 好

> 「さう、わらいここをしなはつたな つて喜んで歸つて行つた、三思ふ三間も うち鏡をこはしたんやは」 ごないしなはつてん」

ないしようかしらん」 うちの人が歸つて來たら怒られるわ、ご 謝つたらよろしやないか」

タコ坊主がこはしたミ 云ふここかしら

やはつてん?」 嘘ついたらいかんわ、

一人の女は家を出て行つた。そのこわし

一寸見ておくれやす

も睨めつくらをする鏡なのださうだこの た三いふ鏡は隣の主人公が毎朝約一時間 は實に切實な感じを受けるが、第三者は 人間は自分に直接利害關係のあるこミに 出てゐるこころに興味を覺へるこ共に、 二人の女の對話の中に二人の女の性格が ばならぬこいふここを教へられた。 が出來るものだ三云ふこ三が分つた、絕 利害關係が無いだけに正當な判斷に解決 つて批判し判斷するだけの餘裕を持たね へず自分のするここに第三者の立場に立

冬の寒い日暮れの事、哀れな男が、ひぎ

の賣子までが理由も聞かずに子供の可憐が次の瞬間に見受られた。紳士婦人新聞 を抱へ、まだ一人の男の子を連れて雜沓 はるられなかつたのです、それから二三 さに金を惠んだのです。全く同情せずに に「がまぐち」から幾金かを與へてゐるの 道在く者が振向いては、この憐れな親子 う。眼は群集の心でした。誰も金を惠む また見たのです、相變らず汚れた浴衣を 年經つた昨日の朝、 翌る日電車から降りてくるのを見ました が同じ場所で金を惠ぐまれてゐるのです 日過ぎた日暮れの雑沓の中でまた彼の男 の中で頼りなく立ちこまつてゐるのです 特許だつたのでせう、けれ共道を誤つた を摑んだ新手の乞食、そは彼の男の專賣 私三には間隔があるのです。人情の機微 氣が付かないでせう。それ程に彼の男ミ は私が斯うした視方をしてゐる事も勿論 彼の里の過去は知いませぬ、また彼の男 の哀れつほい線は見へません。 者もありません。彼の男の何處にも以前 す。私の苦笑は申すまでもありません。 連れてゐません。無手で醉うてゐるので 着てるましたが、ごうしたものか子供は 泊りがけの商賣をやつてゐるのです。一 やはり四人連れでの商賣なのです、その 人々は彼の男を醉狂ミしか見ないでしよ 彼の男を同じ場所で

て、可笑くはないでせう。笑つたつてそれは生きてゆく笑ひであついたのである。いくら事を云ふこ彼の男は笑ふでせう。いくら人間の一人に遠ひはありませぬ。こんな

京阪電車の十三分

初田新水

近來それがなくなつてきたのは、自分をを吐き、絕望の叫びを上げた事もある。を吐き、絕望の叫びを上げた事もある。を吐き、絕望の叫びを上げた事もある。を吐き、絕望の叫びを上げた事もある。を吐き、絕望の叫びを上げた事もある。。

「本知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作するここが出來るの生きであつたからだ。

「本知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作に熱中するので、不知不識のうちに句作するここが出來るからである。或る時は自分をを吐き、絕望の叫びを上げた事もある。

らないここを、いよく~痛切に感じる様のこ心を靜かに自己を愛育しなくてはな知る力が明かになつたからだこ思ふ。も

はないことを、いよく) 所切に悪しる程 を表示しているが出来るのは自分の結進 が、いつたものが出来るのは自分の結進 か、いつたものが出来るのは自分の結進 を事もある。こんな境地に居る私の句も る事もある。こんな境地に居る私の句も を事もある。こんな境地に居る私の句も を事もある。こんな境地に居る私の句も を事もある。こんな境地に居る私の句も を事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る私の句も な事もある。こんな境地に居る ででしまぶので な事もある。こんな境地に居る ででしまぶので な事もある。こんな境地に居る ででしまぶので としないまた。 ないことを がないことを がない。 がないことを がないことを がない。 を、 がない。 がない。

無我夢中

度い
こ思
ふ
。



各地柳塘

川柳雜誌社

十二月七日夜於日本橋倶樂部本社の本年最終の例會を催す。路郎主幹が所本社の本年最終の例會を催す。路郎主幹が所方からの參會者の熱心さもわかつたわけ、大た記多数の來會あり、句作後各自己紹介をなた記多数の來會あり、句作後各自己紹介をなた記多数の來會あり、句作後各自己紹介をなた記多数の來會あり、句作後各自己紹介をなた記多数の來會方。

曲りながらも自己満足 焼 へ 無 條 件 に て 無 條 件 に て 無 條 件 に て 時勢には勝てす姑の氣がよ姑の留守は日 足の早い てま し 滅足の 姑 邪 60 ら引わ 3 , 75 なり 間 3 きけ V) 1 巨雞江萬梵翠汀文 牛 水子 帆樂樂峯柳蝶 2

風、稔、伊佐美、ひろし、鶴峯、瓢山

萬樂、悟空

、萬年青、里十九、夢中、赤ン坊

一水、突支坊、孤舟、愚陀、京二、凡天、テル

郎・吉朗、秀聲、琴人、かほる、柳笑、炭車、

※會者」たけし、

かい痴

一、賀名芽、文蝶

スラくくさして 姑の 肩に觸れ ハラくくさして 姑の 扇 り へ 飯 がまだ焚けず姑 の 無 日 へ 氣 衆 して暮し姑はきつちりさして光澤 を 見せばはきつちりさい姑を 里 で 泣 きがの方の理風も う な づ け る がに留守させる程 う ま が 合ひ姑は 凝の 事 も 思 つ た 眼 で話し姑は 孫の自慢 で 生 き て ゐ る 姑は 孫の自慢 で 生 き て ゐ る 姑は 孫の自慢 で 生 き て ゐ る 姑ば 孫の自慢 で 生 き て ゐ る 姑ば ない布裂を姑に見つけ ら れ がけ ない か お話 姑 留 守 さ 知 れ がらない 氣樂 さ に なり おほせ 姑のくせにもなれてやせて ゐ る がのくせにもなれてやせて ゐ る がのくすにもなれてやせて ゐ る がらない 氣樂 さ に 金 は な し な に な が やうやう判つで來 姑 の 肩に觸れ 姑の機嫌 対しない時代 がいるない時代 出戻り の今日はれん 9: 足 木綿 中 て姑折 姑か 0 9 がし 座 風 咳 折 あ 針 ļ 3 D' っに へ行こさ言ふ 部 錆 ò S n 座わび屋 4. てくる 冒 7 Z K り替へ いた音 てゐる たわけ 3 7 3 來 赤ン 萬年 テ 同 悟同 嶺 孤同毒 びろし登 秀稔雅千桂美突貴 安 流沙風郎 京 1: in 山杉 けし 坊 青 水 月

- 10

質質働資 軸ははは はに 琴妻 で い 鏡巾 琴も る姑佛笑 ラデオへ嫁いれて 佛の で 佛の 彈吐の心虚へで 磨ばかっ 母母のま 文さ氣 く嫁け けにに もばもて 智慧を借りる 八百屋 で 立 て 惱 3 で寢るて £ さはの高 癡 8 あ で云 く賞騒さはの高 3 り素 き枕ちれ見ひ 同一同貴梵放炭嶺毒榮巨萬か赤稔孤桂丸 萬同素同放同虛同賀同里同 山樂馬車月仙一水青る坊 名 舟風葉 九

讃柳翠放桂美京赤琴た里丸萬ひ孤鶴賀 同愚同 萬毒賀テ讃赤雅た琴黒 アン けーナ 年の 名選 に 楽仙芽ホ月坊流し人子 発展 風郎二坊人し九葉青し舟峯芽 に 楽仙芽ホ月坊流し人子

十二月

1

社

4

務

所

0

た

知紙紙紙紙ゴデ紙紙留酸紙 市紙 > 包包 包 5包 包包 包山 上に膝が濡れて るがからいっちこのれて來る 紙 包みが上 社友 忘年 句會 不時から心療橋筋、心療衛・本社々友懸襲・ 1 x みみの 包間 わ V 1 がける直書に 1 鳴 からして き子 盧 したへ 曾 しかあ 釋供 い良 ある 6 本 3 ちざ細 3 なく 意な C から 紙紙 p. 紙 つな切 た 込 包包があ へて切包包 包 \$ IJ IJ 同二同か同稔同一同突同雅夢巨柳 原長 ち お 坊 流中水

加香、金倉 は十 き、大 堂で忘 U 士 3 あ È 111 大いに 月 柳 好者 v) 年 古、舟 Щ に談じ、本社の益々發展する事に 喜のうちさけた 會合に一同胸襟を開心。 過で 柳 雜誌社 マ、革郎、光路、翠峯、新二柳子、萬よし素人、 舟。ひろし、 = 5 0 柳子、萬よしい 0 萬歲 を三唱散會し 新水水 1: 耽 食 p. 0

氣蓬

弱に

ふ度

ラ

別に

3

~ 3

1:

75 4

かる か。

女の事に

の札を情婦

婦にわたされる へ

孤素舟亂新

舟人々耽水

情婦もの気質なて

覺酌

40

でく

n

TA

8

長生きへ変長の連盟とは子供されただが、 其金を情には 長生きの年す 6 好 易 長長 婦だなけ 生生 4. 草束人 ききいに 席題 見婦婦婦 けか情をして 3 巨柳 てニ を情 雜 年ま 賴婦 質 て日向をさがす年になりいたのに長生き嬉しがりいたのに長生き嬉しがりいたのに長生き嬉しがりいたのに長生き嬉しがりいたのにあるやうに生き り大婦 印 1: た 0 0 すこ こ ş きる情情など婦婦 < 入る 情婦塗 き云ふて かして 長間を 出 大 情が婦婦 3 # 4 生き手へる 生 i とばすぐにひる 典 4 IIn 聲 身黒や ついさ か・ * てよく D È た て事芸 6,0: 7 -(長 6 + T かか。出 一う生き 話なり 思云 n To 3 あ持 切り思ひ 3 P 互 i ひひ也す 來 3 5 3 同か同舟ひ琴革萬翠 二柳子 観 同 ひろ し 萬よし 路同 同 貴か 同同孤同同黎同 ろし Ĩź ほ選 よし 戶 人郎 郎 Ш 3 3 舟 墨

小蓬、志郎、華水、卯生、二南。 むつみ 愚陀、素生、電陽子、一 むつみ 愚陀、素生、電陽子、一 伸、東洋鬼 紋太 南耕、讃月、妻

南。

楊

井二

南

狂.柳

狂

蝶雅二

か、文蝶、京二、甚六、甚坊、浦路、翠石 梅雅、伸、東洋鬼 紋太 南耕、嶺月、春京、山都、ひでよし(兄)、萬よし(弟)、睡花、鳳耽、裸仙、千鳥

2

者)たけし、

東新 謹んで

丸、內匠守。

D.

ほ

3

萬

寄か H あ

鲷 わり、又高 ひろし氏は

11

た

受く

深謝

40

橋盛

大

堂東

不洋鬼

济

氏

ょ

V)

祝

り句當談東リ曠

IJ

同

興

to

盡して

地方多数な額月諸氏の高

時散台を表れる。

洋

鬼、萬 大會

1

嶺 後

茶話

加

變變變變 裝裝裝裝 赤變突變變 變變的變變 變 八當る 裝 裝 裝 裝くのる 垣 ののな 席 0) 6 0 5: 9 0 の後ろ姿 電 1: E 人は i 題 朝 知が幹 す 車最 3 女お化 6 まつ ~ 3 x 後の一般と 2 を中 け同士 上口に一 變水、卵 みこし U 7 人 ある ıŁ. 志前查 交 が装 醉が 0 悉 すり 3 ふ上 亂 踊 て遺 U 7 覗怖 自 人 0 かれて Ġ. つて を惚れ て吞 いく 11 色 5 てん 7 てなり男見屋あり 居 17 高 i れ來 1) 3 内た紋柳甚睡ひで 裸東華文愚南 選報 し太狂六花を狂京 仙丸水蝶陀耕守

生生ウ返返イ 變變變變變數變數量素化量 地人同同 同 図 図 図 図 事 を 水 事 事 表 の と に 生 濁 す で け へ た 回 ち ま 返 返 ・ け へ た 回 ち ち 襟に轉 ちつま 300 かいんな び變 の髭邪 魔 になり 下 なる 男 前かつて智慧を貸し 下 なる 男 前がつて智慧を貸し れんぱでも呑む氣 できころふ 5 さがり 1 生返 疲を 3 IJ あ向かけ るけほり 出れ踏 返け落なて 合け 聯 3 り事る りある 5 ろ 同同議同千同飢同か同山同 む 伸

志柳萬東春千浦 同素卯內文率伸 愚山 匠 郎狂 し丸 京島路 生生守蝶石 陀都

選

になる

耽

0

六三

自怖提提提提 高海提提の灯灯 0011 近灯の人に倉庫 股倉 の提 灯 辻 に の別 さ は の別 さ は の別 さ は の別 さ は 月 位題 蒜 人出びのの暗消夜風 かいい 施柳に えぞめり 3 物は提り たのは 風風 3 たる荷 糸 語云五十五六日夜 液警は 灯無續居が日 風 科待に直 ふて 屋 1 1= 11 雅 る 切 連 ににの ら見歌 夜 3 -1 い灯車 町 エれ宗な今 灯 錢 ぶ悲 なに T 吐 6 ę 3 し概目 台 \$ 高破 世寒 於 地心 つな驛 夫 0 ď 博 3 を出 1: ò T 3 雨 nn B る 8 婦が無 物 ず走 Ti. れ残 て 度 7 上げ トの疑 通越 p' 7 あ 75 + 5 館 (大阪 越いりひ 40 る b' 錢 à v) v) ラ vj uj 3 3 1) 3 UT V) Ш 合 蒼 京 舟 紋梅素東同千同一同柳同た 同山三町笑翆華南嶺む素春文 梧樓郎 けけし 祖 強 當 選 4 洋 人峯水耕月み生京蝶 幸 太雅生鬼 狂 狂 綿が綿棧綿 獨や收島作町百 百阴百家百百百 來念氣五叉五五金貸 は獲 入れ席歌言ら 姓は からつ 露姓出姓姓 十持尚 姓 姓 來 姓は落で 引ける一銭掘っ一銭掘っ to L 01: のへの題も云かれ歸 T なな捨題せれ T 九工 古着重 です氣でなく れば 姓だ 作ふい 聞 2 姓 出 百 迫 7: 0 頭持稚 まも布 るv. n 4 T 3 3 7 け姓 中びて ひ氣 す百子 嫁 て 7 3 夜につ同 着 百姉 4 百 角へ 毌 派に斜 たて る綿 馬鹿の公言云 纸姓 れほしくれるように父は 店財で志 喰 驚 ま入し 百 0 姓 親包梶 入 15 nT 0: ^ ζ 1-3 4 f んだ上 姓 置 つる 事 本 3 9 車に よく 自 3 貰 3 ぬ西 4 3 を鍬を ふ五五 明 渲 れた 己 Di + 17 似手百 人 十り -(U 生活 を見 讀り取 Ti. 3 叱 十十十七 五 あるけり子 幕 幕りよりい合ひ 5 なす十 V ひ紙姓値難ひ 銭銭銭る銭 るみり V] 3 しる錢錢 3 源 惡 双 三 蒼孤 毒 柳 靖 源 葉 梧 坊 太 子 笑 樓 舟 仙 狂 弘 源丸靖柳縣 ひ同 同舟同 ì p. 舟惡義 か萩彩双聞 坊葉弘狂太 るし Ĩā 源 は 3 々太情仙る麿秋

督

歸

~

眞びの

木が宿荷足

更 吨 出

はかかか

1

4

らて

宿るけび

悪ひ毒着双舟

福德等

宿席

へ題

n

水木木木大木葬木さ木木

か. 慢

5

20

木

狂

話

i

を開

きあきる

心深太

本 賃 宿 それできまっています。 ・ できまっています。 ・ できまっています。 ・ ではない ・ ではは、 ・ では、 ・ 松川 賃 の階 江柳雜誌 か 5 3 はだ 部社 られや 雨 うやらな顔 呼 松 U) ~ D. 0 II めにする 家 JII 木 氣 ちた 香 0 柳 賃 具 P 0: 12 fili 5 會 木 内議 してす 0: にし 5: 賃 \$ 賃 る + IJ 7 會月 松 源同か 同孤同柳

12

3

坊

江

い木彼二

綿入れにまれた。 れれ んぽ綿て 着の頭る の着 で羽ぼ 橡 田和日 綿入 織 42 語和のの 舍の る水 側 3 7 0 一出 幼 3 入中 重え 兄はカナットなしい味 U 小来は 7 47 2: 01 る E V' れたしていまりの子 いたななりの子 かの気 S 盐 男 かあり勝男の子 互 蒼 同 孤 三 舟 同か同び同 双同 江 選 薬 3 3 Ĺ Ŧ 樓 舟笑 4

綿綿綿綿綿手綿か綿風綿

共

3

ス

月 たたこ H 屋 夜 5 於 魚 13 亭 なり 松 厅. 町 報

天地人變刻槌屋 理遲相床光 1小のへ席 今 子顔れの 寒 H 中観点は 刈床 、床屋 おこさ 1-65 の今 デア 斜つ屋 す か見 日床 0 けか 世 世を麻 る椅 車 サに 8 n T 6 子 か 七前傷 屋 同 te る剃 ラでを 700 23 ~ か C まって そこ 舟 見趣お据 3 帆 いか来る ちせ味りに役れ 3 助 艸可紫同 可無清喋舟紫蘭招 選 2 鐵 明砲花朗帆吻螺月 助明吻

も和れ雪 の果てに小さっか屋見詰めて 小屋見詰めて 小屋見詰めて か車窓に水車 水車の音れた水車 が車の音れた水車 が車の音れた水車 が車の音れた水車 が車の音れた水車 て屋屋屋 浴繼包町 子むの議くの車 陽笛の水音 車 大炎聴静い東もなる。 6 車 步く 7 柱 7 啃水水 共 車き 0 ئا ت_خ てかくの たにさ 長が 時小止 ゆなひな廻や か 沈 4 U 間屋み 5 2 3 夢同喋同 可紫 一同 無同 鐵 确 朗 明吻

0:

3

殘叱水水水 爭春 夏大 水出 日水 夕晝

光ら車車車ひ日枯吹車兵ヶ車燒時

小の

れ小小小

水水水水寂 車車車車 小小小水飞 屋屋 仁か 生 きる か 3 7 3 5 水 が春 を重 な喋居のた 3 小 り音花せ屋 り朗 Ш

九 がれ輪 受加せな 知夢鳴ま合通 置 返醉 細 踊 け除すり 加め きひりりひき 3 ij め

れ水柾 の脱 渦 0: 11 折動な てかい 7 à 1) *

引腕腕腕縫冴立

ご邪腕腕題

た手腕

ひ

ち電かっ

組組の一と初の形

すして

近隱隱隱隱隱隱

nnnnnn

突隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱隱 十雜川 でので ~ 6 のへへ 4系 不醫尾卜月一 寂奥同兄嬉 1: 1 憲憲 10 隱あ圖 の安者行ン E の目をどのが は辿 3 大 くしたがないて息が 家てい 月に凄笑 れて い字ん 4. な金 立程 落 家に ちた た てに か: 姿 1 って から 付 光で遺 浮合の開 入切た び 時光 で りの 人えず鳥り 本りび 明 15 び血き

喋可町蘭柳喋艸舟一喋町招一柳紫

期明二蝶人期助帆六則二

二誌 月社柳 py 堺支 H 夜 部 於 例 大濱 家

0 五寒に た名い寒 の夜 本な 数社つ 1 7: 参路事 者郎 6 1: 主夕 友 よ幹 刊 つて 作句 0 か淵 賑はして 次湯樓 賑 T =: 三を味迎 報 3 にへ寒

耽せい急

方て軍枕 たほ談 2 # 6 る役に 7 3 目 る嫌 3 猪口 7 を腕が £ H を対 2 5 らずり ち カれ 月太巨萬月瓢松 下路水古下山風

to

1: 7 相の

ア寒 ど獨 北刺足自 天波 約戀寒病寒此親スかうり 風身音惚 皇宣東人 さ室 このよ 我腕腕腕 東の 高 等寒 3 れんすのマ で験に 屋でが旗 75 席 フつ か引出 腕振を く場別できる たし の汽の寒パ寒 3 の題て リナ:す 問 さ天 極便 笛金さッチ 7 IV オ z 规 た題 所 道 U プば 張旗 1. 1 云井 マ供 エガの 震切の 穿 を艦 れすて が知に 寒寒 寒バ V 知 0 3 6 さを圓鶴へ撃知い突式に妻々に 1 事 3 5 ぎ九中組つ子管 ば 北たな てたれ 1: 4 3 5 4 177 0 7 尺のん 間 かいい 下はり > 駄輕は風 の太 風 t P12 う寒がる聞る 思 て寒 て 0 3 c, 1: 窓瓦 3 吹台 15 Di 40 3 た 橋 C 2 2 影配法 さ 0 3 4 1= (間の 3 あ 寒寒のな行 3 b 00 腕の い吹いて さりい 出書 3 人れに 3 上 U 3 音話 色師れし 4) 3 畫所せ 2 郞 太同吞春三莊巨飄 ひ同路萬吞蔓一文萬 萬同錦同墓同 同同五同同 月同 能選る (陽草杉蝶古 草 F 波 陽汀絃柳水樓

除除父除軍除 軸天地 ~ 兵 除人はら題 選品 母は 持 賞品 母は 持 当の灯は照 つっ 出て一等賞を持 上げる學友痩 て り/ 子供戻つ で賞品を臭れて 意品を臭れて 意品を臭れて 7 不旗 は以旗を 3 大賞 近の歸と賞 んちにおはつ お 隊駒 らにの母 6 E U の押 人 7 it oi 公四 お 江江 門大 て持値 7 た 切 かさ 勢れさ つて踏 12 2 股 n 世 が場 せ歸 6 T 出 立れ なて ね春 歩き 出 3 3 5 3 りり出心る ず U 3 莊萬路春太太春交ひ同吞文太一路萬 月松靜錦 同同路 年 柳青郎汀閣路汀蝶飞 陽蝶閣杉郎古下風兒波 郎 兩風閣絃波古

天地人生を答妹明兵を放明兵を入り、其が放門除門な日今で 兵の 見 H てにの火鉢はに女はの 除座離除寒て出か除をた で語今返 3 火の火な使鉢へ火餘鉢の外除 た 鉢に鉢つひ のる紙 切ぐ火のたの置い ら見り日ひ は ずる掃 つ餅鉢上加 お 5: 7 - 5: L てを取でい そ金四 ツ滿 を貯 7 さ燒上讀 4. 疊な浮る居 浮る居は火五 Th 8 事め生り り兵來 7 3 3 春巨吞月太瓢吞ひ巨同萬一吞巨貴 春同月同松莊巨蔓三錦五萬太女ひ

ろ選

風柳水草絃波輪雨路蝶し

汀

F

汀水陽下閣樓陽し水

年

青杉陽水山

た閑髭親あ十電額 十一月五日 於落陽居 水田黄彩 衆題 足袋、剃刀 と袋 に 女 に 遅 れ 勝な 足袋 に 女 に 遅 れ 勝な 足袋のつぎ と子が同じ足袋はく様に な り を削るレザータワシの音をませ な時キット剃刀あ て て ゐ る は 中 の 豊風 呂剃刀持つて居り 十一月二十日 於黄彩居 # 76 り七億窟な中 3

泰洛黄同同泰黄洛 山陽彩 山彩陽

寫五寫一極志死寫慕死寫真年真人道士の眞口ん眞 笑つや遊大 加川 せつが鱗火 ひ文春太太一瓢錦吞萬三 同吞同路同 ろし 蝶汀閤路杉山波陽古絃

阪 同黄尾五洛五同黄洛 彩 彩 舟風樂

公兵

彩秋果陽果

同五同黄尾洛同泰五洛 彩 彩 山果陽

稔素萬伊同桂伊萬稔素丸素文一稔伊 佐 佐 風美樂 蝶人風樂泉舟美 人葉人蝶舟 美

見

まか

nte

賀名芽

自半二お出総催 店火 森 保 こ十 歳川宅 器だった 玉次化稼油促 酒の會 粧 雜川 でけるとかいてあり 雜高武へ つてあ皆 夜月 へは 人生 だ 他 人 は 気 領 領 領 お 題 生 飲 日を 支統部社 ほ れ雛 一年何か歌い出し 一年何か歌い出し 一年何か歌い出し 一年何か歌い出し 一日夜於電相居伊藤線 一日夜於電相居伊藤線 一日夜於電相居伊藤線 社机 U む催同十 で入 7 無づ時る 20 梅 小泣だかがあ が促出 何只に れ店て 抽 0 < かく 83 、华玉、總 ì すぎ II 似て 5 出け 3 支 75 ウィ 駠 飯な V 底れ 部 きりた てたかい 嫌 わお氣 仕 1: 句 7 押 から 返 背 領 7 び茶にか 水 うなれ b チ i 5 文. 谷 りか N ひき際 5 Ĺ 42 3 鮎 大 ほ ずの作句報 素一同稔同文素萬同桂同稔萬 美 阪 里石る 絲 同雷同同 根 Z 選報 風 樂 蝶人樂 九竹 助 相 永

会日もまた向ひの店を 会日もまた向ひの店を をが更けてきて店番ける。 でではかき餅を 焼 く 四番にかき餅を 焼 く 四番に出てから娘らり 活番へよみりさせて虚か 活番へ出てから娘らり 店番へ出てから娘らり に活番へ出てから娘らり 内説の産もか 安産の ま 要産の ま 要産に愉快なか 安産に愉快なか 安産に愉快なか 安産に信頼なか 安産に自 す 安産に令朝おか 店店仇夜賴今お 假假欄 主丸橋 番番討がれ日目 橋橋干ち水の 兼 來 店 道 店 店 上乗び ののかぼ橋 かさけ店ま得 うまだ題 題 できてする。 でた橋 11 3 i 守安 店店りの店店 り始 ζ らし 父 よん 降 學 れ踊 To 舟凸 3 屆 2 5 見 い校い 長 75 ばり 8 て闇 n 兄がプログラムら振らしうなり n 6 れずん から P 11 2 通 暇が火のの静 つき 泊 3 7 £ 水 3 C 0 國 2 あ 出 ね決さ 書 立 通 聞 正通なり あり 7 0 の知 1 40 1) ょ 0 HI 監れき き母 V] U) E 3 3 7 13 同か賀鮎石同鮎同 る同眠石同同同鮎同同觀里 同同質鮎石里 る名美竹 十選 名 + 月九 芽美竹九 學竹

十府柳

雜

女系で男は 大家の世間 は 女 ないには 様 ないには 様 ないには 様 ないには 様 ないには 様 の世間に ないた。 迫さ兼 女女才 内への 遠いへかまだく 女郎花の 遠いの まだん 馬 10 4 鹿 女 ŧ 1: る俺あで 3 お 1: 75 5 さ云ふ 7 1 n P V) け U あ か 0.出 U ni 3 毛同同

無 主吉泉春僧

兼 雑屋を で題 支誌 月 部社退 房怨十 111 て困 Ti. 3 搜 4. 社 to 25 例 橋にな 鐵 9 松洲 鳥取) か眠 選報 ほ る聲

根手に他人のが振手になる。 挨はて 御辞なら ん 一人の様なですのかり 拶 月支誌 女 75 十部社 1 V) 暮なば むで思 t 向 女 H て アミ んめで愚 夜柳 3 3 吟 た顔前仲 だ聲暮痴 通の V) 事 3 訛りな 恥に 1= 3 3: す 6 f 於司句十れ來大な 間域。これる鏡り 於 しなな云見 すれ 間場 3 3 3 4 vj U V] E 猿坊堂主 밁 放士舌一同湖同耕佳同清同鐵 府 選報宅 民水 水 我」是風

長挨疳挨あ疳結挨挨疳挨疳別 瘤拶れ癪局拶拶

にのを丈のはのにのはの氣

瘤拇瘤な

マす

カ ウ お 蕃 ウ す ウ 女 コ つ 新 色 眼 思 ご 他 金 停 抱 へへへへて 1 ん聞眼鏡鏡れ所ぶ車い エエ揃やエれエ 性性性な席十雜川11ひか!て1給ヒさへ鏡越越 ち場か席 〈行き のののへ向題二誌 のヘチ題は裏 うつ 母爐ら 月社柳! 1, 1: + 糸屋 かものふて冷一 手がうへ性を v) 町 魔事 な な 朝 な 事 な ふ か 於博 給以功 句诗个 物館 大 カ・川 合 ほ 舟 三同湯寶同毛藤同晃同 猿 坊 無 堂 主泉 僧吉 卓 三同湯同毛藤 坊 無 同孤同陽没る 同 N 同晃同

(特選冷金冷冷 髭妹妹妹妹手妹妹妹妹妹妹妹大拳身義ほ妹さ よ大冷 AND DE へへく切ね た一人の妹がガッ 0) 行を座灸 りか据 0 p. CI vJ 3 業子 選ほ 梧 仙樓 3 4

僧吉

堂

#

音の れなおたつに編う 火ルび事で n τ 腹んにて 0 れてなるがで松苦 3 してが拗 つて な鉢水水知へ立く竹笑賣れ起 火るる ちれ座ひりる V) 1) n 3 3 同同毒同赤同沒蒼双陽孤悟一虛新稔十柳喜源しか同舟同赤同双稔毒蒼 食梧葉喜子樓子亭舟郎醉白水 字 路狂由坊

毒 蒼 十 同 稔 沒 喜 孤 双 ひ か 陽 義 虚 梧 字 仙 樓路 子 由 舟 子 しる 亭 情 白

喜食選報 享子

のなのの

ひ同同舟

3

È

毒同新稔陽一沒双舟 喜 食葉 仙 水 亭醉子子々

選

亭情白 仙

川神

0

浪 炙 癇癇信癇 交外夜 突風 北田 き 島風 圃 雪 佳 佳 癪癪仰 癪 ï なきするロ い番は我家 いたもた火の 神違くの焚 神染んで 0 3 糸つつ を を を は きす 題な きつに道衆女賴系ん あれけ兼十 つたな冷題のま先はむ糸糸題 たれる唯手短取 V] た親ったい H 12 毛た針神先 大の番へ 火の番へ 火の番へ 風糸である。 (廣空風 5 な切糸日 癪 p, 强子 た小な 夜 せりにみな 池 にた 風に地な 3 \$ 癪 75 专 僧っ 不は輕 の島ふ 7 きて E 散風の肩 伸穴忘猫 雪 4. 部 (0) 、眼鏡越し の痴を聞き かる 少朝雪か る風 nI 6 た砂 0 1 朝 テ 句 5 鹿柳 てうで、風 待埃切 3 2 0 L 15 19 松並 け膳朝み 人糸 3 IJ -ć th 5 V) 5 V] 思 井 È 光哉 共 駒 大阪 駒美駒城 同駒美互柳 娛城駒升選駒娛紅美銀柳紅選 光良地 選 A 知選人坊 知 知 人 坊 人 月 報 顏知 思鹿月人水 峰坊三士 人鹿子坊訂思子

女亡門女 塗鼻 下妻口下下緒 癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇癇腹癇癪癪癪癪癢癢癢 佳佳佳佳 たたたの 表りに過れている。 もう 兄な虫 文 立 2 T 0 H 儘 其 ŧ THI b 家 20 0 音なを定し 00 H È 灯 來場 早に Б 叩 女の 75 3 ののい持 から 懰 音的 女心 7 2 下 圖 下 3 くする 恥 0 ιþ 4 1 我 3 7 憎くさ かしく 正 きょう しった 見歸 T 駄味駄松 n 水の普な切默れ , , f なり いの淋の 21: 駄り る者門りりり糸 事 內也 UT 3 り飯 る 白福瓢波良わ福一し選福同普同瓢川湖同光同葭同 白同 わ同 it 1: 47 47 たる る郎助篳紋三る助流る 助 門 館西舟 哉 郎 3

お梳惱

1

雄水い

報

小川

爺

御よ病紋く室 プ空手 労財 焙 夜そ灯夜寒夜遊んが遊に遊のなって 遊れかびずばの ż 酒て傘傘席草咲へ 席十松柳 古途 男題類い菊 歸氣いはいも に來別 雜 V) 蹄れば暗い 我家が 風 夜遊び の恐ろー いて夜遊びの恐ろー は出來てる様な話し 提 は出來てる様な話し 接 は出來であ出歩く癖にな なで夜遊びの恐ろー 題 親てれ 似たの 午 支誌 6, 菊 つて 案山菊 輪頭 し茶て 指輪 5 後部社 花 指 Cr II む心櫛 八 苫 み屋 輪輪が は孫は 櫛、な 拾 ふ 今日 輪禮が孫は 出の 株 f 時 城 5 から見 座 0 嵌 111 敷で 於天狗 \$ の様 7 重 8 --7: 柳 ふ -(たた 人醒 3 祝に f > Ŀ 75 2 贴土 落茶席 禁治 5 込 き聞太あ 知 振 ひ立 知 立互 7 例十 なかなりいり こしく 目 1 撫 本 3 ij 5 產 V] 3 3 見れみ 酒 5 v) 櫛 田會月 鼲 柳 柳錦茶一撫 縣石 柳茶柳選一撫 松 i 選 柳選柳松茶 富太選 富 同紫同一普波選同普 撫 111 久 久 路 す

变变

の 島

茶醉最最

量ふ合合

路水期三

路水朗

雄魚

路朗

先夜内眞眸そ眞最生學情相にの相後 水 1 L行 に涙ためて眞相はの種がばれて一宮相の無言を一破っ のがは知 賴急一席十雜川に ダ 1: + 3 軍 十二月 7 川柳 音げ スでカメーつき歩ける す スはや 1 50 3 雜 П 月社柳ま オー シャ 説さ 2 知 九刮社 、当され 6 糸屋 欠伸 がなざに ル日る 日本に一本に、一本は、 V) " H いつ II 1 かる 小 夜 PT: 3 相、夜学 バメラの お 0) " 3 3 柳 於 にりは 町 n もう あれ には買 弘 しんさ がは氣 午 於綠之助 出 to 子 向 3 戀を有つなる かい 3 居が よく光 0 3 前 前 CA 媚 1, 6 眞 力 せ會 に立立 t 居 れ强な笑 at in ベメラ 似でき 綠 4 伊藤 i 大阪 學v す N ò V) 時 vJ 5 例二 助選助 Ħ. 會月 夢雷幸綠 幸雷終 之 之相永助永相助 絲雷同 統 し美 之助 縣島 之助相 す佐 永相 報

V. 2 V.

水狂陀

新つか聞愚毒彩加

水さる路陀仙秋香

話

一席雨

温し手綱のま 一月病み呆 一月病み呆 5 猫病さな盗 まざろ まい い月をかた はい月をかたない月をかた 子猿 てし 八の n ず返 供処し ても ヤ: 百 鮮へ U 屋上 の £ 0 處 B 店 かった 3 ζ f + 泣り閉 1= にお居 な行互な 立か = なり せせめ U 月 同双孤源舟選同毒舟新孤 葉 子舟坊々 仙々水舟 つ双選新柳愚 けさ

十十自十破雨帳稼羽添內二二轉二れ親尻い織へ職

宿枕枕

直邊に

大 旅 題

物

壁を

父的

立置路

両

選

親

月二

十二日夕 海

於天下

本 多 聞 知

至誠

111

大阪

同二水

竹三

立立立立

話話話點

たる僧

3

0

か

n

3

葉秋舟々仙

猿猿猿猿猿

廻 廻 廻 廻

忘步 5

> て出 15 D'

丸彩孤舟毒選舟

きに

50

暖簾

4

3

75 3

直頼急一席十雜 類まいす 月記れで 日 月記

コース 話立 話ので歩

博

物

館

111

N

報

+

月月車月

仙々水舟醉

ほ

3 合

> 三今三 料まお料料先料料 猿猿つ此猿猿猿一 廻廻ッの貧廻廻鏡 シンシャン LL しに 球を母に替ふている親父! 「味線」三味線 月次歸 回拾 以下 れば水 でいる いで いで もなな は 0 け三連 よ いかかったかって たかまれた。 在 5 てす 行こふさ 味を 猿 を顔主 0 所 ておかで三階 知つたるが 見が氣 3 2 値 12 さか 3 ベ終 0 **D*** 别 去 切设 道 3 亡昧 6 にあ に料料つ 7 V) 1:0 へ着 C , p, を開 なな 猿狼廻 i 竹本二水 0: ゼ理理 1. 見 UT る 8 見 3 3 尼 V) V) 3 4) V) 3 きる 3 L 3 i る 崎

> > 二吟木

竹女三

二同

水

同同同

報

仙狂秋陀舟水

は喝荷 七 7

3

\$2 3

杉

陽郎居山陽両郎陽杉亭陽杉居

て

る

3

0

0:

3.

V)

ti

V)

歯笑歯を

装

19

力

1)

腹

て

3

5

2 腰は

5

手 伸つ

1= II

2

席の Ĺ

題 ス

戀戀真變

のになっ

明矢風お

は見

さんか

單山杉陽

-(

7

裝裝暗

も入入さ出淋類入

3

入

外

して

見

A

7

る

3

1

0

3

36

一聚飘吞樂福吞萬貴選同多貴一朝

年

歯に

0)

É

2 11 0 It

7

丈駄

目 0

です

世外

U 事

3.

給に

7

杉坊樓陽居田陽青山

すい

き入歯見せ

龍

it

今は

3

無

i

尼

崎

_ 机ての や外接 を編題づつつに旅のにののににの題はのつ子れ 7 れれれれば足女草合名妾やう や枕きがへ る像 i 1: 7 ち選 0) 子に父た枕原て へ 枕の枕 鼾 枕置枕 I 連れなきいでも 賑れ でも ればか く気に to 向 5 かっかい てる 產 中 いにや母 1: 夢 あて 脈よやく 4. 3 to たに i か見にがわ て蹴 って 包慢小 T ぶかふ婦 20 年 合 ٨ したり を便逢てゐか喋 ませ 手あ路 枕 が來 n 4 お殿 は朝 る V るん りれ元 IJ 3 V) 3 U] 3 È しひある 3 3 颚萬選一堅樂樂瓢吞多吞多堅樂貴選貴萬一樂黑多貴吞貴 E 萬瓢樂樂吞

霞 饭 杉坊居居樓陽聞陽聞坊亭山 両 ↑ ○ 變 な 變 變 變 變 變 變 變 青 奉 變 す 變 2 肘線編 人焦焦焦 人装り装装装装装装装器開机装 " 3 たにへさ 坊に 戀變は切り のへののたのの 刀寫し髭 歩きれ か 食をに か 食をに か な か の の 月 の誠に f あわ車あ列 す を編のある か挙さに の振ら 3 れげでらよ装い の見んで るハ 5 愛を電 V) 光に來た 製業的な 事の編 出 裹許 カッ ん僧の 車ば 變れ振 4 貰あ子 お り 變 ん 装に キ儘が V) 11 なんで上追 は女吞れ 装た 編編 かなやに ¥ 1: 1= 4 一装笑 見の供 んで 金 2 12 物 1) いて追の人は寫 構 3 向 て 屆 6 が終め 夫編に取れ でょ 50 3 え 0 3 算 1 しず CA に無 ٤ が睦 C it 77 12 新 及 1 9 15 まじく 0 風れな勤 か屈ねい見踊戎出 多の 3 75 開 1 也 6 40 16 間目 200 v) v) to り地る i る男せ v) 橋 3 na Ĺ 萬吞樂貴吞一貴瓢一萬路樂路吞朝路萬選朝路樂貴吞萬路吞一樂吞一樂 年 红 45 被

燵燵炬燵い千男羽蘇さ蘇穌 かか 雄ま晩一坊根なれ加き席 H # て雄 口居 Ŧi. ツ魚木 かめかる はて無葉 H 燵 で供のる 7 ご歌 炬玉店 120 が雄 0) 吉 8. 0 根 は留め多雄を無飲て 1: 朗 を美 0 1 て きみげ伸 店 Ti. を割 ゐ居 仲居つ 今 り出 U 3 る ん間 3 B 村 吉 同虚同吉秀玄斧同吉虚玄 副

炬炬只炬寒菜二追屠滿屠屠

青陽亭山陽杉山樓杉青郎居郎陽陽郎青

白 則聲洋葉 朗白洋堂

玄關 **支關** 新變變包包包劍ス男 一次表表のこれで男さり一数表の質視かれて母は一数表ので見るのである。一数表示ので男さり一数表示ので男さり一数表示ので男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男さり一数表示のこれで男を表示のことに表示のこと ケー 內 0 関でフト氣のつい のでフト氣のつい がはお留点 のでフト気のつい の流しに一人 、 子男 方の子、包紙、變紫 7 で駄菓子屋 出母 3 7 っさい顔 i 1= いた足馴 て 3 1: 傘守關冷 取に 向 化 を見 3 3 3 12 馴轉 1: 世 ふ來 0 坊 17 ij 子 £ U. 7 3 定 no 4 炒 男 (神 小 てゐる 男 3 泣 いた 1: てるれ 澤 7 ひ青 7 なのく泥 月 出 0 0 が聲 子 子 + 泥友う ٤ 3 千 Ĺ 郊芳香子 鳥 芳千郊千郊芳選 香 子鳥村鳥村子 同干 ひ同虚同吉秀斧選同ひ るし ろし

掛掛故た切に美 傾鏡 3 くらし D. 1 to でら自 0: 3 ナ た伯母の芸が降ろう 4. 柱信 1: 炬燵、柱美 一世の世代世野を 加 3 いつて まら日 7 き美人にて シまいが と美人にて かまいが と りまれいが 竹 女 7k

00

まで II

前聲類

兄

美人、たそがれ、掛い日 於木三居 竹本 トへ秋が來る 尼 崎 3 3 U] 取り 水 無翠三 明 城 花里鳩 8 7 物 n

白

青龍白宮

0

3

也

0

3 ~

成 ツ

2

一月二十

应

H

果果箱朝 物屋屋 代く 果物 果物 屋 柿 か 唐 一がき 疵 昨日 0:0 らは柱 × 錢 から п 林 出前 持ある さ山儲 檎 た果物 2 T 8 ふい 1= 賣け 違 0 0 あ た子に 屋氣物 ふれ位 って 7: 7 そう れる子に た 3 (大阪 3 あ 高 ર 4 b 困み やの物 30 なって 800 ij VJ 音屋屋 3

二同二同木吟竹

三女城

水

同同

琴

同同

際やつき聲して 発真似てい 來て か 聲 4. 7 1: b 7. つら�� n n 3 ば 膀競 ζ うに 父 似 2 7 つ賣 泣 3 3 同放同久一雪

いやう歌ってい パヤつご聲! ンショ聲を* 「落語家客な にぬ / 4 て母 1: 娘路 親 声に語 の次外 0 笑 7 12 へりは呼買り たか んで 4 3 3

素大同四

泣撃出 きが路 撃出撃

ア土一父母 ツ俵 学の親へ

3

H.

麔

武庫川の 轉ろんで 柳 談 花藤 化なさかせました際原鳴玉報 72

役

者

翠星三旭一

蕾柳打堂柳

のけ炬れた

かれたがったが

3

つまづ

> 0 0

いそ

2

7

輕

3

引

3

明

花

か

れず

でがれを手を見ることえると

る 3

1

輪の へる 音に

3

來る

經進館

行

から來る變裝

秦川

會

(長崎)

15

u

う湯彼蓬親彼彼 ら上のかれな女 なななな女 警察を受ける。 響響を要している。 響響を表している。 響響を表している。 響響を表している。 でででは、 でででいる。 ででは、 ででいる。 ででいる。 ででいる。 ででいる。 でいる。 でい。 でいる。 。 でい。 でい。 でい。 でいる。 でい。 でい。 でい。 でい。 でい。 でい。 さのた鮎 7 作っていれい 餘題け女鮮さ夫足 おこの後は路の明日で 3 人さし 11 誓の か雑文版 幾分勝つ たが煮拂が むいなう心く かの 熱 女懸 於例 云 から資基 0 51, 2 古 立 U 6 る 3 僧 事 鮎日 朗 だてしま 添り 0 に精 9 1 へで子碁 15 0 2 くば 知 5 | 美兄は吳 て 居 た見る ちま (尼崎) 父 0 i 75 通ら待澤 來 03 H かて 進 v) ò UV v) ける りれち山敵碁ひい 4 3 村 たします。 居也 4 同同同點同同鳴 6 2 月選同秀同虚柳吉同同柳同虚同吉月如 朗 繰り返った 選 報 朗男竹 玉 白堂朗

車 る用 んでなりりれう あ 台 v) 点色

迷潮は多れ 弘は武潮迷愛は れる 多 n 浪亭 子る 亭浪る

目お居雜佛おお離 出雑す煮の雑雑煮 酒度煮ま餅は煮煮餅 7 月日廳 雑煮のなる なななななななななない。 ななななななななない。 ななななななない。 ななななななない。 ないで胃散 か散 た祝んる を探 結ら 胜 和構父のや世で焼煮 (兵庫 6 すなてかい えりるり月 岩 崎 縣年 常居き餅は居る 匠

T

報

う名轉り

選

つくめどに馴

りけれえり

眠同處同斧柳吉秀如 葉堂期聲竹

障障雨障霧病開障切可コ 子子寒子吹室け子り愛ト

二木二同二竹吟 同竹肸同同二同吟二木 同同竹同木同夫同二二吟 竹三水 竹城女 女水三 水竹女 城女 竹

ぎる長す

て瞳び校る

1: ٧, D: 例娘 氣 居尼 兼

to L

白

がたしいなけり 本二水 愛 子



後輯編

で居ります。 で居ります。 で居ります。 で居ります。 で居ります。 で居ります。 で居ります。 で居ります。 の諸氏の一名な、門村花菱、川上三太郎、 を第の研究感想漫筆等を満載するここが出來たので堂々たる が生評、柴谷柴舟畵伯の服装、 はいよくくますくと異彩を放ち が見ゆるここになりとた。 なる川柳漫畵は新春誌上から所 が見ゆるここになりとせて、各社 を方される句出版の一名が、全川久流美 です。この點多忙中を特になる が見ゆるここになりとた。 が見ゆるここになりとた。 が見ゆるここになりとで、各社 をが、中出橋重、吉田清の一月評」 とです。(路郎生) 第です。(路郎生) 第一次にて型にのは表示としてといった。 第一次にてといった。 第一次にである。 5: 一面時できると思え さな心ひそかに念ふので本年は大郎時間のやりくり

い批すの評る ものがに き柳得雜 にも 柳を真な ので 作面事は である。 1= 6 の一途に進むより外にはない。ただ各自が異点に、心の糧こしての川柳あるこすれば、主幹の常に川柳雑誌調こら云ふべきいあるこすれば、主幹の常に川柳雑誌調こら云ふべきられる言葉ださ思ふ。 ちれる言葉ださ思ふ。 おおしての川柳祖にしての川柳祖にしての川柳はない。ただ各自が異劇にはない。ただ各自が異劇に

▲各地柳壇の句は破竹の勢で集 へなら口に驚いてゐる。本號 の如きは数十頁を要する多數の の如きは数十頁を要する多數の の如きは数十頁を要する多數の を情がを忙のため、松盛琴人氏が に深思しなければならぬので、 一層の精選を期するここながら、 本能がを忙のため、松盛琴台ので、 一層で動き又覧ごされたい。 の點も又談ごされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點も又談こされたい。 の點は一層であり、本社から萬 なし、一月九日京都 は、一月九日京都 は、一月九日京都 は、一月九日京都 は、一月九日京都 は、一月九日京都 は、一月九日京都 な、一月九日京都 は、一月九日京都 の規定通

> (三柳子 號 3

り「萬よと」で川柳を募集する事になつた。題「白鶴酒ご長命上素 名吟をよせられん事を望む。 名吟をよせられん事を望む。 名吟をよせられん事を望む。 名吟をよせられん事を望む。 金ヶをよせられん事を望む。 全がをませられん事を望む。 金ヶをよせられた。 一月三日上阪、各地柳社を訪問された。 で、各地柳社を訪問された。 で、各地柳社を訪問された。 で、各地柳社を訪問された。 で、各地柳社の御嶽寺心には今回本 れるます。 で、各地柳社の御嶽寺心市と日時で、各地柳社を記れた。 で、各地柳社の一路氏は十二月十六 日月三日上阪、萬よし居を訪問、 一月十三日萬よし居を訪問、 一月十三日萬よし居を訪問、 一月十三日南よりに、 一月十三日本版、古一月十六日死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を 十二月十七月死去哀悼を

募

▼句稿は各題 所氏名か明 紙に認め、 するこさ。 肥 住 BII .

く楷書 書體はなるべ 雜誌原稿」 III 3 柳

取

次

第六卷第

四

J號課題

咳小

八岩 麻 篠谷

毒素葭春

仙人

共選

生原

選選

使

・締切は嚴守さ おこさ。 封筒に朱記

土女

優

鹽十

句以內) 花

月五日締

切

櫻

丘野田

B

選選

昭

和

py

年

町柳

二陽

共選

各地會報は清 れたし。

用紙は牛紙又 訛のこさ。

は同型の 一點紙

投稿其他につ 12 限あ。

魯

號

集 生.

發

行

JII

麻

路

郎

選

近作柳樽(廿句迄)

各地柳壇(會報)

文

章(評論研究感想吟行漫文) 社

の用件は下記川柳雜誌社事務切(編輯に関する件、投句、購讀

き御間合はす

社。務。

のこれの て返信料

所。廣宛。告

願

ひます

封

店審捌賣

(大阪)

大賣捌

n

ラヤ

書房。

其他市內各書店

玉森堂 サ

(神戸) (京都)三宅

米田、 (明文堂

後

膝

(函館)石擬

(石川縣小松)マコト 東京仲見世) 價

料告廣

七六

御一報下さいますれ ましては本社へ直接 本 誌 0 廣告に 就き

定 壹箇年前金(特輯號 八月特輯號 一部 一部 一部 一部 村就共) 参阅六拾线 一部金五拾线 四十十分线 一部金五拾线 人名英国人格线 人名英国人格线

郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に顧ひます、 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます 質であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼ 御送金は掘替日座内阪七五〇五〇番

へお拂込みになるのが一番

ば御相談に應じます

▼御希望により集金

送本封銀

但集金郵便

第三號課

月五日締

切

題十句以內

何月號よりご御指が願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して (一年分) には定價の外に手敷料十錢を申し受けます▼御注文には

御通知顧ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事 昭 和 牟 ÷ 月廿 五日印刷

月 日發行 大阪市 西

編輯兼 發行印刷人

成區千本通五 毎第 丁目七番 月六 一卷 地 一第 H 發

行號

大阪市西成區千本通五丁目七番地 郎

麻

柳 雜 社

替穴阪三一五一四番

町六〇三番地

大阪市住吉區杭全

111

柳

誌 振替大阪七五〇五〇番 社 重 務 所

爾東 濱 天 部市部仁部市部市部市部縣部市部市部市部市 成 柳 П 幹津幹町幹區幹町幹松幹町幹隈幹石幹北幹新 事野事丁事潛事二事町事而事事事事事不事所事情 松方矢八德野龜 田町井 萬 柳七子

田 簽 条 金 4 外此 川 田 區 八 阪 花 本 松 幹耶幹邊幹糸幹八幹急幹區幹 本幹町 事起事市事幽事町事報事報事與事補 高町森本辻松川丁中丘松根水町中町本語 下合目川三並療谷丁澤 田 橋 H 柳 光所站力 郎

富 北 鳥 京 平 支界府別濱大取鳥岡山都京森青川兵 市支府支阪支取支口支都支森支庫支奈部大郡市部市部市部縣部川 111 防 府 幹三幹通幹北幹町幹町幹大幹町幹川幹塚 丁事り事一事市事東事法事大 **宝**島 重引 淵 田 井 駒 京 诺 鐵 白 飯 猿 堂 Ш 洲 郎 Ш 彩

赤小藤藤國長田田嘉片岡大池 四⁴ 井卯^村枝崎中中納岡本道澤 井酒本 清不之 史柳香辰 司木助作郎秀涯二純方平雄居

柳

祉

品

前安武吉吉川川岡大西伊 田川笠田岡村上田島原藤 31. 雀流山 鳥花太面濤柳彦 太 郎美椒清平菱郎子明雨造

龜太德西原岩岩 別 程森蛭篠柴木小 子原谷村出 本崎社 元 太魚二雨舟錢重 子陽柳笑風人路

友本長石猪伊 持 庄北喜酒藤矢竹高高 淵田谷川野藤社 山田井里田內見橋 柳川双 貴___華燕愚 上悟飯駒好冷多柳_ほ 山路徹子柳陀 し郎山人古刀聞骨る

越松松楊安柳桑中中中中中辻谷高彙詑 村橋重間 加光町二杏洲京鐵光濁柳隱 香哉二南三馬郎 洲路 水陽子馬稔郎鷗堂

三麻松安川橋 住森檜嶋水水朝青 好生盛井合本特 日 一 日 日 日 革葭琴る舟柳友 亂太代翠鮎黃新伽 郎乃人し々子 耽郎二峯美彩水舟

			栙	北區天神路町五五(榎並方)田 萩 麿
			嵷	東區島町 二(谷中方)本 赤 城
			Ξ	宋區 朱星町 二丁目合 舟 内
	米		桧	河 選
覧	DRH		棚	東區南農人町一丁目田 愛 堂
	臣		MXK	京都市七條大宮東入原 京 京 郎
新	长	\prec	柱	サンニューロック 単本 変数 関本 を 変数 関本 を 変数 関本 を 変数 関本 を 変数 ときまままままままままままままままままままままままままままままままままままま
	報		鹿	市外守口町樋之口、車庫裏)田 新 水
件			柘	市外守口町寺内川 双 葉 子
			本	作者區 天王守时 10四〇野 落 存 榜
			<	木 毒 仙

SH 敏雄 内 石 河 受 1 田 叶 田金之助 校 朝 田 * 早 廣 未 五 爟 11! 步 # 摩 * 重 萬 靊 滚 K 直 臣 置 鯊 無 1 浙 네 \equiv 吞 貴 能 咖 友 画 土井萬年青 惠 는 매 赋 河村繋 枝 倕 # 根 森本黑天子 屋 瓢 霞 樓 7 平田顯太郎 古野熊太郎 賀 技 四十四 揻 吞 E X * 安 黑 田久太 E 栅 縣 Ï 嶽 難 治 紫 田 按 卖 海 田 + K 水 回 蓉 Ξ > 製 括 먘 뢣 中国 重 王 品 海電 1 图

里

旕

霍

校

加

E

舟

三

治

H

FT

鳥

取川端

柳

社

上中 堤 谷 增山山 藏 田 下下田村島 (イロ〈順) 田 立源 新 同 同 同 佳川太*放ゴ 屋 丁 丁 屋 町山 目民 水 || 夫 町我 ム 水量子 風

埴

吉社

賀 正

營業 地方出張探査ノ依賴ニ應ズ 財産隱匿、特許侵害等ノ探偵 ハ年中無 (調査正速) 休

素行動靜祕密調查 紊出人 / 所在探查 產 信用調 查 赤埴探 地 秀 吉 派 人

八〇

正

部支田梅社誌雜柳川

横都森水永川藤姫

南田 西淀川區姫島町五眠 花西村 尾兵原 村庫 區 疊里 北賀 本縣 恩加島町 鄉武 鳴 屋 町十 字庫 py 西郡 三九 万万月 濱鳴 玉

客 三_員 小村谷岡大土六 好 幡松村崎坪井角 革 赤曼 桂丸文桂 耶 丹平稔枝葉蝶風

住 形 堂 南 東 萬 樂 中 保 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東

賀

川柳雜誌社北濱支部正

IE 賀 壽 名 賀

淸 衣 阪 遠 中 內 蟹

尼崎市大物村西横堤二〇七ノー 村 崎 市 大 虚 Ŋ 七〇 白 朗

尼崎市 ロセノー聲

謹

賀 新

年

月 元

を起し新春を期して柳誌「ひぐま」を 今回當市各吟社が合同して新に當吟社 且

後援を希ひます。

出すここに成りました、切に御愛讀御

ひぐま」一ヶ月金貳拾錢

月十五日發行豫定

國舘市東川町一九八、森里魚方

V ぐま]]] 柳

舘函

祉

賀 Œ

東京市芝濱松町一ノー 崎 柳

會五路

謹 111 柳 支

雜誌 部 新 香 神奈川縣平塚町旭座前 同 人 111 社

部

賀

平塚町新宿一一五二

崎町五九八二兵庫縣武庫郡魚

Œ

住

田

亂 耽

旬刊

發「しむまた柳川| 刋 月 行

一目丁一通濱津中區川淀東市阪大

增

中

酒

美町衛城

座前人一五月

小

平塚町 原塚

新娱

四九五鹿岸訂

山山

鳥

上沙町古 濱大 位 本 市 市 一丁目 目 一天王 五二區 柳 雨

三大 山 津阪 屋市 町東 三淀

三川 六區

賀

IE

電氣旬報 柳壇の句を募る ◆用紙ハガキ、題隨意 安 井 井 C 欣 3

正

賀

六九町隈花市戶神 部支戶神社誌雜柳川 (人 同)

北岡小蓬 カート 大 一 大 一 一 大 一 一 元 元 元 田 町 -神 日野 華 楊井一 戸市生田町三丁目四八ノ 赤 松 一一一一志 一丁目五六九 千 卯 郎景 生 水 年 南

八三

大阪市南區安堂寺橋西語

女

賀 īF.

岩 大阪市外守口大枝二〇三 本本 武 子 人

E 賀 水 宮 Ш 加 原 前 誌社加古川 \mathbb{H} M 本 納 H よ 黄 洛 梅 尾

陽

彩

Ш を

川柳雜誌社別府支部

芽 社 别 府驛 前 誦

詑 吉 吉 市 木 司 間 田 城 田 別湯 別 別毛 別府市驛前 府 市豐 府 市晃 市坊 市無 行合町卓 驛 港 松 通堂 市吉 町僧 前丰 原泉

謹 賀 新 年

謹

賀

秋 更

昭和四年一月一日 川 新 柳 北青牧松山山植植村南細硲家飯 年 ケ 島田 川木田並本本田田上保川 池 し地 社 葭波普光光菊白湖恒松信 支 舟紋門哉雄三郎舟風汀二流る子

賀正竹	賀 正 大阪市は	賀正宮		* .	賀正森
大阪市港區八條通二丁目 田 芦 穂	大阪市住吉區遠里小野町二〇	尾しげを		東京	田ひさし
大阪市住吉區杭全町六	置 医 一	賀正 二 好 革 郎		京都 市 下	京都川柳社
麻生葭乃	ではられるだらうさ思ってあます。 が、昭和四年は私等夫妻にこつて割期的か、昭和四年は私等夫妻にこつて割期的か、昭和四年は私等大妻にこつて割りです。 満瀬ささかもつて驀進するつもりです。	な族上げではありますが、今年はウンドの通り舊冬一ト族上げました。尤も小さの通り舊冬一ト族上げました。尤も小さの通り舊冬一ト族上げました。尤も小さの通り舊冬一ト族上げました。	賀正 桂元 彩太		賀正上田新一郎

賀正池澤樂居	賀正 中澤 潤水	賀正 長崎柳秀
賀正 富士野桜馬 (愛宕川柳社)	賀正 佐々木三福大連川柳會	質 正 橋本 狂史郎 京城櫻井町一ノ四七
選 賀 新 年 尼 崎	大阪市遠遠區和荷町ニ丁目六五大阪市遠遠區和荷町ニ丁目六五大阪市遠遠區和荷町ニ丁目九二二大阪市遠遠區和荷町ニ丁目九二二	會報第二號出來郵券二錢封入あれ 電 正 川柳使命會

					,
賀 正 古 谷 件 內	賀正村井多喜女	賀正若井たけし		賀 正 松 丘 町 二	質正澤井朱唇子
賀正 石井突支坊	賀 正 松 盛 零 人	賀 正 東 出 肌 香 六次初子湯	賀 正 前 田 五 健	質正日曜堂書店	賀 正 中 見 光 路
質 正 秦 原 京 耶 川柳雜誌社京都支部	一柳 窓 中 社 」 一个 一个 一	大豐橋 里	川柳あけほの會 川柳あけほの會 正 久 田 狂 水 福島縣石城郡磐崎村 水 大 水	、賀正伊藤/綠之助 一學 藤/綠之助	賀正 丹波太路

賀正喜田飯山	質 正 高 見 柳 骨	質正 越村加香	登 正 福 田 山 雨 樓 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	賀正本田柳一路	賀正 高橋かほる
錦町一ノ九鈴木星廻へ	一 賀 正 長春川柳會一同 a man a m	質正畑田よら江畑田よら江 大阪市浪速區裏美須町 大阪市浪速區裏美須町		賀 正 神戸三人組 岡田 郊村 小鐵 千鳥	
	賀正庄萬よし		4-	質正 電話東三二二二番 電話東三二二二番	

賀正

各位筆硯の御

柳家ミ局外者ミの兩方に見て貰

▲一寸廣告をします▲番傘は川

各位筆硯の御多幸を祈る

傘川柳社

大阪市此花區野田驛前

新聞雜誌印刷並二圖書出版業

印刷的美術

藤

本兄

弟社

電話東一七〇番・七七〇番大阪市東區農人橋二丁目

は幾册かなロハで讀める利益 らば決して損の無いこさがわ のやうであるが實行されたな があらうさ思ふ。つまらぬ事 たならば幾册か求めるうちに 近に出た本の古本を求められ やうに公立社の棚から至極最 子にさつては、誠にありがた こさは容易ではない。たさへ 今のやうにあさから (新刊 い譯である。諸君も私さ同じ されるのであるから我々讀書 した新らしい古本が時々提供 る。殊に公立社の棚には斬う を買ふのは

莫迦らしい事であ 古本が出れば全く新らしい本 必要がなくなる。極く綺麗な うなればわざく、新本を買い ころになれば、もう古本で至 新本を買つてもいよく~讀む が出るさ新刊な一々競破する 極新らしい本が出てゐる。こ

(路耶生)

賀

正

高 價 1 申 E 受 H £ す。

御 通 知 次第 早 速 參 Ŀ 確 實

迅 速に 御 取 引 致 します。

金 田 晴 正 蓍

桃太郎の研究

并裝美本 定價 五十錢 郵稅

我國民性にピッタリミ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します 日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に 一錢

大阪市南區日本橋南詰南入 話 南 五 番

賀

內科 呼吸

漢準漢

漢洋 聲

電話 南四一院

長

高島屋 八八番

九二

E

眼

院

隨

院長 醫學士

意

<u>Ц</u>1

本 院

縣

正

雄

院

大 神 西

宮=寺前町 戶=穴門上、 阪 梅 條 H 松天

湊町一、 東雲町 島 我町二 小野柄二

六

玉川町

九三

Œ

背

大日市麥酒精艺會於

清凉飲料リポンシトロン



勝絕南

初 南は總て**吉**方 大官社幣 厄除 厄大官除社幣

日初

初 辰卯 住

吉

神

社

樂南冬知ら

、由良ョリ乗合自動車 一和歌山市乗換省線湯 上**臼濱温泉**

每海日路

船出航浦

女歌劇

元旦より一週間

あびっ

幡

社

開運厄除祈禱

よ 4



三皮膚を美しくす から、 り、顔の美しさを増しますので、心ある御論、皮膚は大第に腰きこんだ様に綺麗にない。 重要な事がおわかりになります。 常備せられて居ります。 常用すれはニ キビ吹出物を防ぐは勿 ――斯ういふ薬です

なニキピや吹出物にも確かな効能がありま

信用を博して居ります。

= その他毒のある

よいもので御座いませんが、

この楽は頑固

も、ニキビや吹出物の多いのは見る

吹出物

婚人は固より

で夜お子方のムツかる時など、この上ない時初などになる事が御座いません。気や蚊

愉快な痛るや痒さが止まり、さいれた跡が 虫にさいれた時、この薬を附けますさ、不

阪大・京東 館天順谷桃

